
ファンタシースターポータル2 日常編（永遠なる信念続き）

コーラ大好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタシースターポータブル2 日常編（永遠なる信念続き）

【Nコード】

N3141X

【作者名】

コーラ大好き

【あらすじ】

ファンタシースターポータブル2インフィニティ 永遠なる信念の続き。

シヌの事件から数ヶ月……

事件を解決に導いたファントム達は、いつも

の日常に戻っていた。

彼らの日常や、変わった裏話を投稿しています。

くプロフィール

(オリキャラ)く(前書き)

突然別小説になってすみません。

プロフィール

(オリキャラ)

ファントム・レガス

Lv200 転生2回

性別・男

年齢・18歳

種族・旧文明人

身長・185cm

体重・75kg

タイプ・ブレイバー

髪・pop2のヒューマンの 髪型、白銀色

服装・赤原礼装、赤

所属・リトルウイング

趣味・貯金、銃の手入れ

血縁関係・兄

亜空間事件、欠片事件の終息に貢献した英雄。

数ヶ月前のシヌの起こした事件……

通称“狂神の信念”を解決した。

(グラールの人々には非公認であるが、狂気的な事態が起こったため人々には“狂神の信念”と呼ばれている)

事件終息後は、恋人であるマリをリトルウイングに入社させた。

ファントムの部屋に住んでいる。

銃の手入れは欠かさずに行っている。

特にM92Fは使っていないパーツも手入れしている。

旧文明時代の頃から貯金癖があるのか、資産がかなり多い。

特別記載

事件終息に必要なだったレッドタブレットと、コクイントウ、力、知能について。

唯一残されたレッドタブレットはシズルに渡しており、研究中。

コクイントウはマガハラ内で破損してしまい、メインウエポンはサングに。

因みに、このサングはエクステンドコード を使っており、効果は戦闘不能。

シヌを圧倒したウィルスの力はグラールに戻る事で死滅し、元の実力に戻っている。

シヌの作ったウィルスの特効薬を開発していたファントムは、エミリアやシズルの知能を越えている

ルシフェル・レガス

LV200 転生3回

性別・男

年齢・21歳

種族・旧文明人

身長・185cm

体重・73kg

タイプ・ブレイバー
髪・顔の左半分に髪が少　しかかっており、残　りは後ろに流
れる様　にセット、白銀色。
服装・ゴコウバオリ、黒
所属・ローグス
趣味・ファントムをから　かう事。
血縁関係・弟

4年前にヘルガ・ノイマンのHIVEを破壊に貢献した英雄。
その後は、パートナーのヴィヴィアンと共にローグスの仲間に。

“狂神の信念”の事件後はローグスに戻り、いつもの日々を送って
いる。

弟のファントムにブラコン気味で、しょっちゅう構う。

現在のファントムと戦うと勝つため、実質グラール最強。

特別記載

堕天使ルシフェルから貰った（自覚無し）魔剣レーヴァティンにつ
いて。

魔剣レーヴァティンは、地獄を支配する堕天使ルシフェルから貰っ
た自我を持つ剣。

旧文明時代に一度だけ喋った。

この剣を授けた理由は、シヌを神との戦争の戦力にしようとした為。
ファントムを手助け出来るようにと……

気持ち次第で打撃、斬撃を変えられる。

しかし、事件後に消えてしまい、ヒューガに新しいセイバーを作ってもらっている。

神山・マリ（真理）

L v 1 9 0

性別・女

年齢・19歳

種族・旧文明人

身長・168cm

体重・44kg（推定）

タイプ・レンジャー

髪・ナギサより少し短い

、 黒髪

服装・ブレイブスコート

（ファントムの私服

）

所属・リトルウィング

趣味・Hな妄想（ファントムとの

ムとの）

ファントムをこよなく愛する恋人。

ファントムもマリを愛している。

元々はローグスだが“狂神の信念”後、ファントムの誘いでリトルウィングに入社。

社内での成績はファントムに次いで2位。

現在ファントムの部屋に住んでいる。

かなり変態気質で、ファントムが他のヒトと関係を持ってしまっても、そのヒトを巻き込んで夜を共にすることも……
例) エミリア、ナギサ
ルミアも巻き込もうと企んでいる。

夜は公平性を保つため、1週間に2度ずつファントムと寝る体制を敷いている。

未だに欲求不満気味で、あんな事やこんな事を妄想している。

ロスト・ニユーベル
LV200

性別・男
年齢・30歳
種族・旧文明人
身長・186cm
体重・87kg
タイプ・ハンター
髪・ソフトモヒカン、茶
服装・コウツエシリーズ
所属・ローグス
趣味・筋トレ、人間観察
肌の色・焼けている

深緑色

“狂神の信念”後、ルシフェルと共にローグスへ戻る。
少し前から歳を気にするようになった。

旧文明時代での兵士経験のせいか、人間観察を常時行っている。

リリース・ノバリス

LV195

性別・女性

年齢・25歳

種族・旧文明人

身長・170cm

体重・47kg(推定)

タイプ・レンジャー

髪・ポニーテール、金髪

服装・黒スーツ、下はズ

ボン派

所属・ローグス

趣味・サバイバルゲーム

事件後、ルシフェルと共にローグスに戻る。

実はルシフェルに好意があるが、恋愛に疎く、どうしたら良いか解らない。

趣味のサバゲーは、戦闘の感覚を出来るだけ忘れないようにする為。

ローグスのメンバーを連れ出すようだ。

カムハーン

LV250 (オリジナル)

LV200 (シズル時)

性別・男

年齢・30歳 (死亡時)

種族・旧文明人

身長・179cm

体重・67kg

髪・地面につく位のロング、白

服装・かなり露出

趣味・不老不死の研究

血縁関係・父

旧文明時代での二代目太陽王。

父親のシヌにだけ心を許しているが、SEEDを操っているのが父だと判ると戦いを挑んだ。

本当は自分の国や、国民を守る性格だったのかもしれない。

シヌに追い付きたく、同じ不老不死になろうとしている。

精神を制御するカムハーン的能力は、その成り行きで生まれた物。

今後出る予定は？

ゼロ・ブラック・シヌ
Lv20000 (推定)

性別・男

年齢・数十兆歳 (推定)

種族・第一人類

身長・183cm

体重・69kg

髪・オールバック、漆黒

服装・黒い服に黒いコー

趣味・人類滅亡の方法発

血縁関係・息子

ト
案

5000年戦争、SEED事件、亜空間事件、欠片事件、及びこれまで存在した人類の滅亡に関わった……
人間悲観主義者。

マガハラ内でグラールの滅亡を観察していたが、決死の覚悟で戦いに来たファントムに倒される。

このままファントムを道連れにするのは、恋人のカゲツを殺した人間と同じだと考え、ファントムをグラールに送り返す。
結局その行為も人間らしいと思う。

気づかせたのは、シエラの“想う”と言う感情だった。

目を覚ますと棺桶の中。
出てみると地獄だった。
(自覚無し)

如月・華月 カゲツ

性別・女
年齢・20歳
種族・第一人類
身長・170cm
体重・46kg
髪・膝位長い、白
服装・仕事時・スーツ、黒
仕事外・ワンピース、白
所属・シヌの秘書
趣味・仕事

第一人類時代に、シヌの秘書だった女性であり恋人。

シヌとの最初の出会いは同じ孤児院。
お互いを意識し合ったのは結構早め。

神病感染者が起こした人類抹殺期間中に、非業の死を遂げる。

今後出る予定は？

シエラ

性別・女

年齢・18歳（死亡時）

種族・旧文明人

身長・170cm

体重・46kg

髪・膝位長い、白

服装・白い服に白いコート

所属・太陽王特別学校

趣味・ラキナー海岸の散歩

血縁関係・息子

5歳の頃、たまたまラキナー海岸に来ていたシヌと出会う。活発な為、知らないヒトに対して喋りかける。

中学生になると才能が開花し、学校内で一番の学力と運動能力を持つていた。

その才でシヌが普通のヒトではない事と、太陽王だと言うのを知る。ついでにシヌの信念も知る。

しかし幻滅せず、尚且つ止める為にカゲツの代わりになろうとした。好意があつた為だが……

高校生の17歳の時にシヌとの子を授かる。
しかし、身体が弱かった為出産後に亡くなる。

この時に誕生したのがカムハーンだった。

今後出る予定は？

↳プロフィール

(オリキャラ)↳(後書き)

次回は既存キャラです。

プロフィール

(既存キャラ) (前書き)

ユニバース主人公も書いています。

くプロフィール

(既存キャラ)

エミリア・ミュラー

LV100

性別・女

年齢・17歳

種族・ヒューマン

タイプ・ブレイバー

所属・リトルウィング

リトルウィングで働く女の子。

“狂神の信念”後は普通の日常に戻った。

生き返ったミカとは一緒に暮らしている。

ファントムに好意があり、大胆な行動に走る事も……

ナギサ

LV185

性別・女

年齢・18歳

種族・デューマン

タイプ・ハンター

所属・リトルウィング

趣味・修行

欠片事件をワイナルと一緒に解決した女の子。

“狂神の信念”時に、ファントムの自己中心的行動を止められなかった事を悔やみ、日々鍛錬の毎日。

この頃は他のヒトと修行し、技術を会得している。

ワイナルとの関係は変わらず良好。

カフェでいつも喋っている。

ファントムに好意があり、エミリアと“比べる”と消極的。

ミカ

性別・女

年齢・27歳

種族・旧文明人

服装・仕事時・クラシカ

仕事外・いつもの

シリーズ

、黄

所属・インヘルト社
血縁関係・弟

旧文明時代でカムハーンの妃だった女性。

“狂神の信念”時に、シヌの“お礼”により生き返った。

現在はエミリアの部屋に住みながら、インヘルト社で働いている。

ワイナール

性別・男

年齢・26歳

種族・旧文明人

服装・仕事時・クラシカ

仕事外・いつもの

所属・インヘルト社

血縁関係・姉

シリーズ

、黄

旧文明時代で一流の科学者だった男性。

“狂神の信念”時に、ミカと同じ理由で蘇る。

現在はリトルウィングの居住区に住まわしてもらっているが、インヘルト社で働いている。

ユート・ユン・ユンカース

LV130

性別・男

年齢・16歳

種族・ニューマン

タイプ・ハンター

所属・カーシュ族

趣味・修行

カーシュ族の少年戦士。

“狂神の信念”時にシヌに負けてしまい、強さを求める様になる。
ナギサとはよく修行するようだ。
ファントムとも修行する。

クラウチ・ミュラー

LV185

性別・男

年齢・35歳

種族・ビースト

タイプ・レンジャー

所属・リトルウィング

リトルウィングの社長。

ウルスラとは夫婦、エミリアは娘。

日常に戻るに連れて、ファントムと良く飲みに行くようになる。

ウルスラ・ミュラー

LV180

性別・女

年齢・33歳

種族・ニューマン

タイプ・フォース

所属・大手ファクション

会社

クラウチとは夫婦関係。

最近、大手ファッション会社に入社し、すぐさま幹部になった。

チエルシー

LV180

性別・女

年齢・ヒ・ミ・ツ

種族・キャスト

タイプ・レンジャー

所属・リトルウイング

趣味・資格取得

リトルウイングの受け付け嬢であり、リゾート地区にある酒場の店長。

資格取得の趣味は変わらずに行っている。

最近フロントムが店に来る様になった。

愚痴を聞いてほしいようだ。

(エミリア達についての愚痴)

シズル・シュウ
LV175

性別・男
年齢・21歳
種族・ヒューマン
タイプ・ブレイバー
所属・インヘルト社
血縁関係・父

ナツメ・シュウの実子で天才的な頭脳を持つ。

ファントムに貰ったレッドタブレットの研究に没頭している。
ミカとワイナルも手伝う。

ルミア・ウエーバー
LV150

性別・女
年齢・18歳
種族・ヒューマン
タイプ・フォース

所属・ガーディアンズ（ 主にパルムかGコロニー）
血縁関係・父、兄

ガーディアンズの教官。

一時期、仮死状態だったが復活。

ファントムに好意があるが、目立った行動を起こさずにいる。

イーサン・ウェーバー
Lv200

性別・男

年齢・22歳

種族・ヒューマン

タイプ・ハンター

所属・ガーディアンズ（ 主にGコロニー）

血縁関係・父、妹

4年前に起こったSEED事件の解決に貢献した英雄。少し前と比べて、英雄の言葉を受け入れている。

“狂神の信念”解決後、仮死状態から復活している。

ルミアのファントムへの気持ちには気づいており、認めている。

カレン・エラ

LV185

性別・女

年齢・22歳

種族・ニューマン

タイプ・ハンター

所属・ガーディアンズ（

主にニューデイズ

）

血縁関係・双子の妹

ガーディアンズ教官であり、幻視の巫女。
イーサンと同じ時期に仮死状態から復活。

グラールの現状を見て、幻視の巫女で意識統一を図っている。
双子の妹のミレイは、最初の幻視の巫女。
神とミレイは面識があるようだが……？

イーサンとは恋仲。

ルウ

LV160

性別・女

種族・キャスト

タイプ・レンジャー

所属・ガーディアンズ（ 全惑星）

趣味・人間観察

多数の同型機をメインルウが制御する最新鋭のキャスト。

現在、全機が仮死状態から復活している。

趣味の人間観察は4年前から行っている。

マヤ・シドウ

LV160

性別・女

年齢・28歳

種族・ニューマン

タイプ・フォース

所属・ガーディアンズ（ 主にニューデイズ ）

ガーディアンズ研究部の研究員。
主にAフォトンの研究をしている。

事件後、シヌがAフォトンを自在に使える事をファントムから教えられ、一度会いたかったと言っている。

トニオ・リマ
LV170

性別・男
年齢・30歳
種族・ビースト
タイプ・ハンター
所属・リトルウィング
血縁関係・息子、娘（双 子）

リトルウィングで働く元フリーの傭兵。

妻のリイナと子を設け、幸せに暮らしている。

リイナ・リマ

LV160

性別・女

年齢・26歳

種族・ビースト

タイプ・ブレイバー

所属・リトルウィング

血縁関係・息子、娘（双

子）

リトルウィング所属の元フリーの傭兵。
トニオの妻。

現在は育児休暇中。

ヴィヴィアン

LV170

性別・女

種族・キャスト

タイプ・ハンター
所属・ローグス
趣味・ヒトの勉強

ヘルガ・ノイマンの思考をベースに作られたキャスト。
しかし現在は、ルシフェルや多くのヒト達によって作られた、新たな人格が形成されている。

イルミナスが完全に壊滅したので、旅は止めてローグスで暮らしている。

趣味のヒトの勉強はしなくても良い程、感情が豊か。

レンヴォルト・マガシ
LV200

性別・男
年齢・72歳
種族・キャスト
タイプ・ハンター
所属・リトルウィング?

カール・F・ハウザーのコピーキャスト。

しかし、イーサンとの戦いで人格が確立されてある。

ルミアの意中の相手を探しており、どの位の実力が試したいらしい。
(お父さん?)

この頃リトルウィングに来る様になった。

ヒューガ・ライト
LV180

性別・男
年齢・21歳
種族・デューマン
タイプ・ブレイバー
所属・GRM社
趣味・女性を口説く事

GRM社の社長。

元はガーディアンズで、イーサンとは競い合った仲。

根っからのグラール教信者。

趣味? の女性を口説く事は、最近では自重気味。

現在、ルシフェルの新たなセイバーを作成している。

アルフォート・タイラー

LV195

性別・男

年齢・34歳

種族・ビースト

タイプ・ハンター

所属・ローグス

通称ドン・タイラー。

全ローグスを束ねる首領。

“狂神の信念”解決後、仮死状態から復活する。

ルシフェルを副艦長に任命したのはタイラー自身。

艦長の座も譲ろうかと考えているが、ルシフェルは艦長になるつもりはない。

ライア・マルチネス

LV190

性別・女

年齢・28歳

種族・ビースト

タイプ・ハンター

所属・ガーディアンズ（ 総裁 ）

現ガーディアンズ総裁。

前総裁のオーベル・ダルカンは養父。

元々は教官であり、ルシフェルの訓練を担当した。

“ 狂神の信念 ” 後、仮死状態から復活する。

最近現場の空気が恋しくなってきた。

フルエン・カーツ

LV180

性別・男

年齢・31歳

種族・キャスト

タイプ・レンジャー
所属・同盟軍

同盟軍総司令官のキャスト。

“狂神の信念”後、仮死状態から復活する。

未だに、教官だったチエルシーに同盟軍に戻ってほしいようだ。

バスク

LV175

性別・男

種族・キャスト

タイプ・ハンター

所属・リトルウィング

趣味・勉強

元フリーの傭兵。

現在はリトルウィングで働いている。

知らない事を勉強しようとする性格。

ミカとワイナルに話を聞きに行くらしい。

クノー

LV175

性別・女

種族・ヒューマン

タイプ・ブレイバー

所属・リトルウィング

元ガードイアンズで、エミリアとは面識があった。

実力主義なところがあり、リトルウィングに入社した理由もそれに
当たるようだ。

(ユニバース主人公)

バアル・セレンサー

LV200 転生1回

性別・男

年齢・21歳

種族・ヒューマン

身長・184cm

体重・76kg

タイプ・ハンター

髪・ユニバース主人公（ヒューマン）の髪型、茶

服装・仕事時・ガーディアンズ制

仕事外・スピーダ―シリーズ

ゴシ― カリアシリズ

所属・ガーディアンズ

趣味・Gコロニーを散歩

ズ、服

ガーディアンズ機動警護部隊長。

イーサン達と共に、SEED事件を解決した英雄。

今回の事件に介入出来ずに、不甲斐ないと感じる。

ルシフェルとは面識があるが、ファントムとは会った事が無い。

休みの日は、ノンビリコロニーを散歩している。

くプロフィール

(既存キャラ) (後書き)

何のLv何だろう……

まあ、目安として。

技術の違いでLvが変わったりします。

次から日常編だ！

何を書こうか……

〜日常〜（前書き）

バトル&シリアス以外って難し！

前半かなりゲスですwww。

〜日常〜

リトルウィング

居住区 ファントム自室

俺はパチツと目を覚ました。
時計を見るといつもの起床時間だ。

ファ「重いな……」

何故重いかはわかっていた。
マリが俺の体の上で寝て、エミリアとナギサが腕をとっていたから
だ。

3人共裸、もちろん自分も。

昨日が週末だったせいだ。

今日から

エミリア（週明け）

ナギサ

マリ

エミリア

ナギサ

マリ

全員（週末）

エミリア（週明け）

.....

と言う周期だからだ。

時々休みの日があるが……

ゆっくり眠らせてほしい……

腕を取ろうとしたが、ギュッと掴まれる。

ファ「……………」

しかし、週末の為にベッドを広げさせるとは……

そう……

俺のポケットマネーだ……

いやいや、別に望んでしたわけじゃない。

マリ達に“お願い”、なんて言われたら断り難いというか……

まあ良い。

3人を起こすか。

ファ「君達、起きる時間ダゾ」

すると眠そうに返事をしてきた。

エミ「あとちょっと」

ナギ「今日は休みを取ろう……」

マリ「エへへ、あと3かい」

最後は寝言だ。

ファ「……ハア」

これ以上言っても無駄だろう。

半身を起こして、服を探した。

案外近くにあった。

良い事を考えた。

「ファ、フン、恥ずかしい思いをさせてやる」

無理矢理体を起こして、アホ3人のパンティーを拾った。

「ファ、フハハハ、まずはマリだ！」

「マリーにパンティー履かせると……」

「キュ！」

「つと、パンティーを上へ引つ張った。」

「腕にくっついているエミリアとナギサが邪魔だ。」

「マリ、あん！」

官能的な声を出して、俺から離れる。

ファ「次はナギサだ！」

キュ！

ナギ「ハアン！」

これまたエロくて……

ファ「最後はエミリアだ！」

キュ！

エミ「ひゃっ！」

まだ子供っぽいが、これはこれで……

……

何やってるんだ俺は？

トランクスを履き、赤原礼装を着た。

ファ「早く着替……」

3人「着させて〜」

ホントに起きる気が無いのか……？

数分後……

仕方がないので、着させてやった。
今はテーブルに座らしてある。

俺？ 俺はドレッシングルームで玉子焼きを作っている。
エクリプスの食事は当番制だったので、兄貴やロストだって料理する。

炊いていたご飯を盛り、玉子焼きと一緒に運んだ。

ファ「出来たぞー」

エミ「お！ ファントムの料理か〜」

ナギ「私とエミリアは初めてだが、マリは？」

マリ「普通に食べた事あるよ」

ファ「少しは手伝えよマリ」

ほのぼのとした話をして完食。
片付け終わると、事務所に行った。

リトルウィング事務所

クラ「おう！ ファントム指名で仕事が来ているぜ」

クラウチはいつもの場所にいた。

仕事内容を聞くと、原生生物の駆除らしい。

クラ「油断大敵とは言うが、余裕だろ？

メンバーは4人まで、行ってこい！」

大分日常に近づいてきた。

いつもの朝

いつもの仲間

いつもの仕事

朝は違うか……

なにはともあれ……

あの事件から数ヶ月経ち、俺達やグラールの人々もいつも通りに戻った。

これ以上悪い事は起こってほしくない……

まあ起こったとしても、俺が必ず解決する。

仲間を守る事が……

俺の信念なのだから。

ああ、そう言えば……

あの時凄く怒られたな……

数ヶ月前……

ファントムがマガハラから帰って来た直後……

「ただいま」

つとつと抱きついてきたエミリア、ナギサ、マリ。

エミ「バカア！　どんだけ心配させるのよ！」

ナギ「勝手は悪い事だぞ……ファントム……」

マリ「ちょ……！」

言える事無いんだけど！」

俺は3人一気に抱き締めた。

安心したのか、黙ってしまった。

ルシ「さすが、俺の弟だ。(^ | ^) v」

ファ「兄……ブワァ！」

黙っていた3人が、腹にストレートパンチをしてきた。

3人「これでチャラ」

これでチャラなら……
まだマシか……

その後ゆっくり話した。

マガハラでの事

シヌの事……

俺の事……

本心を言ったら全員から一発ずつパンチ（顔に）、正座させられて
何時間も怒られた。

しかし嬉しかったのか、“仲間を頼る”と言う約束した後、それ以
上は怒らなかった。

頼ると言う事は、危険に晒すと言う事なんですよ。
……なんて、口が裂けても言えなかった。

今も、仲間を守る事に変わりはない。

自己犠牲を自重しよう……うん……

もう怒られたくないしな……

〜日常〜（後書き）

次回は神、墮天使、シヌの話です。

ほのぼの系、イメージしないと……

く地獄（パラダイス）く（前書き）

全然日常じゃないじゃん。

でもシリウスは楽。

若干、青の被魔師が入ります。

かなり大きな新事実が……！

く地獄（パラダイス）く

ある次元……

俗に言う、天界。

どこを見渡しても、地平線しか見えない真っ白な世界。

その一区域に、物凄い数のテーブルと椅子が並んでいた。
最前列に向かい合わせで、1セットだけ……椅子にマリオネットが
座っている。

人形「時間だぞー」

マリオネットが口を開いて喋った。

すると、誰も座っていなかった椅子全てに、多種多様な存在が座った。

人形「いや〜集まってもらってすまないね。

呼ばれた理由は解ってるだろう？

……そう…主軸の地獄統治者、墮天使ルシフェルについてさ」

それほど大きくない声なのに、後ろまで聞こえているようだ。

人形「で、さつさとルシフェルを倒さないイエス君とエホバ君に話を聞きたいんだけどなって話」

この場にいる存在……

全て神なのだ。

それを仕切るあのマリオネットが……

人形「神さ。

いや悪いね、作者さん日常編とか言ってるけど全然日常じゃなくて。

あ！ この姿は入れ物だよ」

その後、イエスとエホバの話を聞いた。

神「なるほどね、自分達の管轄は地球であり、主軸地獄やグラールにいたら手を出せないと……
確かにそう言う掟があったね。

“管轄外には手を出せない”

……………

しょうがないな、では私の方で解決しよう。

……他に話したい事は？

あ、君達はダメ。

君達喧嘩ばかりだから……

……ゼウス君とヘラ君だよ！ 1万年位前から喧嘩してるよね！？

夫婦喧嘩は受け付けないんだってば！

ああ、もう、他の神もうるさくなるし……高校生か！」

ある程度落ち着くと、神達は帰っていった。

1人を覗いて……

神「やあ、君だけ残ってもらってすまないね……

“ミレイ・ミクナ”君」

ミレ「言ったはずですよ。

私は神では……

神「でも星霊だ。

長年信じられているだけだった星霊を、君が引き受けたんだ」

ミレ「では呼ばないで下さい。

この会議に呼ばれるほどの資格はありません」

神「まあまあ。

……話を戻そう。

近々、堕天使君と話そうと思う」

ミレ「！ ……何故？」

神「今は教えられない。

ただ…堕天使君の返答次第では、君を生き返らせる必要がある。
もちろん期限はある」

ミレ「！！ 生き返らせる……」

神「久しぶりに、カレン君と話せるんじゃないか？」

ミレイは、嬉しそうな顔をした。

ある次元……
俗に言う、地獄。

寂れた道路を、シヌは歩いていた。

シヌ「……………」
……………お！」

やっと街の入口が見えた。
何やらおかしな看板がある。

右、悪人界
左、虚無界^{ケヘナ}
中央、魔神塔

シヌ「何だこれ？」

？「おい！ 貴様！」

シヌ「？」

後ろを向くと……

羊の顔をし。

黒い羽を持ち。

体が黒く。

ハルバートを持ち。

黒い角を持った……

シヌ「え」と……

悪魔か？」

悪魔「貴様！ 刑から逃げようとしても無駄だ！

刑が終わらなければ、この次元からは逃れられないのだからな！

ハハハハハハ！」

涼しい目で悪魔を見るシヌ。

シヌ「間抜けな笑い方だな」

シヌを睨む悪魔。

悪魔「ほう、罪人ごときが“楯突く”とは」

ブウン！つとハルバートがシヌに振られた。

普通に避けたシヌ。

悪魔「!?!」

シヌ「ほう、ファントムに薬を打たれたが、この次元では元通りなのか……」

……おい悪魔」

悪魔「!」

シヌ「遊んでるのか？ 遅すぎるぞ」

悪魔「グツ、き、貴様アア!!」

縦にハルバートを振ってきた。
その攻撃を素手で受け止めた。

悪魔「!!」

シヌ「所詮人間と同じか」

ハルバートを握り潰すと、塵になってしまった。

悪魔「な、な……」

シヌ「俺に“楯突く”とはな。

……何てね」

額にデコピンすると、胸から上が吹き飛んだ。

ズドンと倒れて、悪魔は起き上がらなかった。

シヌ「やはり、地獄なのか？」

？「その通り！」

やっとお会い出来ましたね、シヌ」

リムジンが前を通り、窓から顔を出す。

シヌ「誰だ」

堕ル「僕は堕天使ルシフェル。

君が主軸系統の地獄へ来れるように手引きした張本人さ」

シヌ「……………」

堕ル「そう警戒しないでくれ。

それにしても、悪魔を殺せるAフォトンの力……

是非、僕の仲……

シヌは車を蹴り、堕天使がいた場所は吹き飛んだ。

シヌ「人間と同じ考え方をする奴に、力は貸さない」

堕ル「いいね。さすが神病感染者を全滅させただけはある」

堕天使は後ろに立っていた。

堕天使はシヌと同じ位の身長で、ボサボサ頭で、黒ジャージだ。

シヌ「何故それを？」

堕ル「行っただろう。」

堕天使ルシフェル。

キリスト教で地獄を支配する存在。

神には及ばないが、心を読む位出来る」

堕天使は手を広げた。

堕ル「ようこそ……
パラダイス
地獄へ」

く地獄（パラダイス）く（後書き）

墮天使とファントムが戦うわけではないんですが……
これが新シリーズに繋がったりします。

主軸の地獄とは、神が特別に指定してある天界と対を成す地獄です。
その為かルシフェルの地獄は、地上界に手出しする事が禁じられて
います。

虚無界や日本の黄泉などの地獄は、特例の時のみ手出し出来ます。

統一されているとしたら、罪人を刑に処する事です。
刑期が終了して改心したなら、天界へ行けます。

実際、神はその為に地獄を作ったんです。
ルシフェルの前任は、神です。

〜恋の始まり〜（前書き）

ファントムとルミアの、リクエストストーリーです。

裏話って良いわ〜。

〜恋の始まり〜

欠片事件を解決した

2ヶ月後……

ある任務での事だった。

パルム

集合場所

デネスレリクス前

メンバー

ファントム・レガス

ルミア・ウェーバー

任務開始10分前、ファントムは既に集合していた。
少ししてルミアがやって来た。

ルミ「ファントムさん早いですね」

ファ「今来たところだよ。」

それより任務の詳細を聞きたい」

ルミ「はい」

ルミアは資料を取り出し、読み始めた。

ルミ「デネスレリクス内で異常なフォトン反応を確認。
2ヶ月前のフォトン反応の同じだそうです。
その調査、及び原因の除去が任務です」

ファ「今になってね……」

ディラ・ブレイヴアスじゃないのか？」

ルミ「ガーディアンズ側はそう考えています。
しかし、あの事件の事もありますし……」

ファ「念入りな調査が必要……か……」

……まあどちらにしても、仕事に変わらない。
さて、行くところか」

ルミア「了解！」

2人はレリクスに入っていった。

デネス・レリクス内

ディラ・ブレイヴアスの巢

ファントムとルミアは、隠れて観察していた。
どちらも双眼鏡を使っている。

ファ「……………」

……………あ、腹からAフォトンが漏れてる」

ルミ「……………ホントだ……………！」

あれが今回の原因ですかね？」

ファ「だな……………」

(ファ)

まさかシヌの……………」

……………」

いや、シヌは死んだ。

そうに決まっている。」

ファ「俺が引き付ける。

ルミアは後ろから攻撃してくれ」

ルミ「大丈夫ですか？」

ファ「俺の腕を信用していないのか？」

ルミ「そう言うわけでは……………って！ 先に行かないで下さいー！」

ファントムは隠れている場所から反対側に行き、目立つおっつにマド。

ールした。

ファ「おい！ こっち見ろ！ 出来損ないスタティリア！」

ブレイヴアスがファントムを向き、羽を飛ばしてきた。
その羽をサンゲで斬り落とした。

「ゲルウオオオオ！」

まるで怒るように咆哮した。
そのまま突進してきた。

ルミ「ハアア、くらえ！」

ルミアが氷テクニックを使い、ブレイヴアスの足を凍りつかせた。
グン！ と止まると、氷を壊して転倒した。

ファ「良いフォローだ！」

ファントムはAフォトンがある場所に、サンゲを突き刺した。

「グルオオオオオ」

バタン！

首が持たれると、動かなくなった。

ルミアがファントムのところへ走ってきた。

ルミ「大丈夫ですか！？
怪我は？」

ファ「無いよ。大丈夫だ。
こここのフォトン値は正常か？」

ルミ「え〜と……………」

はい！ 正常値です」

ファ「そうか、任務完了だな。
早く帰ろう」

2人は帰還を開始した。

それを遠くから見ている黒コート。

シヌ「雑魚でもAフォトンを使えば強くなるが……
あの程度か……

……
いや、ファントムが強くなったのか？
ンフフフフ……

アハハハハハ！！
やはり君は特別な存在だな！
せいぜい足掻いて見せてくれ」

パチン

ルミア「？ 今、笑い声が聞こえたような……？」

ファ「気のせいだろ」

ルミア「そうで……うわぁ！」

ファ「どうし……うわぁ！」

ルミアが床の突起に躓き、ファントムに当たってしまった。
ファントムの上に覆い被さるルミア。

ルミア「いてて……」

……あ、うわ！ すみません！」

ファ「いいから避けてくれ」

ルミア「は、はい……」

……うっ……」

ファ「？ どうした？」

ルミアの足首が腫れていた。
ゆっくりとルミアを寝かせ、怪我を見た。

ルミ「大丈夫…です。
歩けます…から」

ファ「嘘つくな。
……関節が外れてるな…
……ロッドを貸してくれ」

リュウホウジドウを使い、足首に薄く氷の膜を張った。

ファ「無理に治そうとしても悪くなるな。
早く病院に行こう」

ルミアをおんぶして、歩き出した。

ルミ「うう……すみません……」

ファ「気にするな。

それより、君らしくなかったな。

ドジるなんて珍しい」

ルミ「ああいう事もありますよ……
私を何だと思っているんですか？」

ファ「普通の女の子。

弱味を見せてくれない、普通の女の子さ」

ルミ「ファントムさん……」

(ルミ)

……私、なんか……

顔が熱い……

……え、どうして!?!?

急にファントムが止まった。

ルミ「? どうしたんですか?」

ファ「あれ見ろよ」

レリクスの出口。

2体のスタテイリア。

しかし、それだけではなかった。

ルミ「……………！！」

囲まれた！」

見渡すと、そこらじゅうにスタテイリアがいた。

ファ「チツ……………」

逃がす気は無いのか……………」

デリラ・ブレイヴァスとは違って、Aフォトンは漏れてないようだが……………」

ルミ「どうします？ ファントムさん？」

ファントムは物陰に走り、ルミアを降ろした。

ファ「すぐに終わる。
ここから動くなよ」

そう言ってファントムは、戦いに行った。

ルミ「ファントムさん！」

1分後……

ファ「待たせたな」

ルミ「速！」

再びルミアを背負った。

入口にはスタティリアの残骸ばかりだ。

ルミ「流石ですね……」

(ルミ)

やっぱり強い……

これがファントムさんの力……

……

……

エミリアやナギサさんはどう思ってるんだろう……

あれだけ一緒にいたら、好意位持ってもおかしくないし……

……

そっか……私、ファントムさんの事を……

……

ファントムさんの背中……暖かい……

ルミアは眠ってしまった。

ファ「……寝ちまったか……」

外の光りが眩しかった。

く恋の始まりく（後書き）

リクエストストーリー募集中です。

次は何を書こうかな……

く英雄さんの弱点 1く(前書き)

この頃投稿ペースが早いな……

勉強しないと……

「英雄さんの弱点 1」

現在

クラッド6

リトルウィング

カフェ 右奥の席

そこにエミリア、ナギサ、ルミア、マリ、が談笑していた。

ふと、エミリアが……

エミ「思ったんだけどさ……
ファントムの弱点は何？」

ナギ「……………」

ルミ「……………」

マリ「……………」

エミ「あれ？ 何で今の沈黙にマリが入ってるの？」

マリ「いや、アタシも知らないんだよね……」

ルミ「ファントムさんの弱点……」

無いんじゃないですか？」

ナギ「同意見だ。

彼は弱音すら吐かないからな」

エミ「弱音と弱点で違つよつな……」

マリ「……」

あ、そつだ！

お兄さんに聞いてみよう！」

リトルウィング

ランディール号

モトウブ
ランディール号
副艦長室

ルシ「（・・）（エッ・・）？」
ファントムの弱点？」

マリ「そうそうー！」

沈黙……

ルシ「……………」

ルミ「黙っちゃいましたよ」

マリ「お兄さんでもわからないか……………」

ルシ「ああー！」

いきなり声を出され、ビックリする4人。

エミ「な、何かあったの？」

ルシ「ファントムの弱点……それは……」

4人「……それは……？」

ルシ「幽霊……！」

(「。。(「「

……
……
……

ナギ「幽霊とは何だ？」

エミ「一昔前のミカとワイナルみたいなイメージ……」

マリ「お兄さん……」

真面目に答えて下さい」

ルミ「そうですねよ、あのファントムさんに限ってそんな事は……」

ルシ「www、俺を誰だと思ってる？

ファントムのお兄ちゃんだぜい。() ()

アイツは幽霊が怖い！」

ルミ「にわかには信じられないんですが……」

大体、幽霊ってフォトン濃度が高い場所で起こる目の錯覚……
存在しないんですよ」

ルシ「(、(、(」

ならファントムに直接聞けよ」

マリ「聞けないよ。

聞いたとして、喋るとは思えないんだけど」

ルシ「言えてる。

まあ、とにかく。

アイツは子供の頃から幽霊を怖がってる」

エミ「最後に確認したのは？」

ルシ「子供の頃」

.....
.....
.....

ナギ「すまない、幽霊のイメージが湧かないのだが……」

リトルウィング

エミリア自室

ミカはインヘルト社へ出勤している。

ナギサに幽霊の意味を教える為……

ジユ・オン（怨）
を映画鑑賞していた。

丁度スタッフロールだ。

ナギ「ほ、ほほほう……
ここ、これがゆゆ幽霊なのか……
別にこ怖くなんかなかったぞ……」

エミ「いや……
体震えてるよ……」

言った通り、めちゃくちゃ震えていた。

ナギ「ち、違う！
これは武者ぶるいだ！」

エミ「ハイハイ……」

ナギ「まあなんだ……
良いんじゃないのか？
1つ位弱点があるのは……」

マリ「からかえるからね」

ルミ」そこですか？」

この後、ファントムの弱点を知りたいヒトを集めてみると、結構集まり……

くだらない作戦が始まった。

まず、メンバーは

リトルウィング社員

ガーディアンズの友人

ルシフェル、ロスト、リリス

作戦はこう……

3惑星にある心霊スポットに順番に連れていき、どっいつ反応するか確かめる。

名付けて……

ファントムの弱点発見せよ！

3惑星肝試し実験！

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e

〜英雄さんの弱点 1〜（後書き）

続く！

ってどつどつでしょっつか？

区切れは良い……たぶん。

く英雄さんの弱点 2く (前書き)

英雄さんの弱点は2で終わりです。

「英雄さんの弱点 2」

ファントムの弱点発見せよ！

3 惑星肝試し実験！

パルム

とある心霊スポット。

廃村

本当に幽霊が出るわけではないので、幽霊役と遊び役に別れる。もちろんファントム以外仕掛人なんだが。

ファントムには、仕事の気晴らしにどうか？と誘った。

ファ「良いね」

あっさり答えた。

エミリア達は

“やはり弱点は幽霊ではないのか？”

と思ったが、実験をしない限りわからないので、とりあえずやってみる事に。

肝試しのルール

2人1組で廃村を調べ、祈祷師小夜ちゃんの作った御札を持ち帰る。

マッチング

ファントム×マリ

クラウチ×ウルスラ

ルシフェル×リリス

ミカ×ワイナール

エミリア、ナギサ、ルミアはモニター役になる。
その他の協力者は幽霊役に当たる。

ファントム×マリ以外は終わり、これから出発するところ。

夜の為、懐中電灯は持つ。

ファ「手を繋ごうか？」

マリ「逆に繋いであげようか？」

ファ「俺がビビってるだけでも？
んなわけないだろ。
18歳だぞ」

そう言っ出て発する2人。
ちやっかり手を繋いでる。

モニター室

エミ「お！ 出発した！」

ナギ「録画準備、カメラ異常無し」

ルミ「兄さん、準備をお願いします」

通信機でイーサンに伝える。

イー「OK」

イーサンは廃屋の窓から外を見ていた。

イー「お！ 来た来た！」

道の真ん中を歩いて来るファントムとマリ。
丁度廃屋の前を通ったら、出ていくプランだ。

マリ「暗いよう……」

ファ「君はそんなキャラじゃないだろ？」

マリ「む〜」

膨れっ面になるが、ふざけているみたいだ。
そろそろ通る頃だ。

イー「よし！」

バンツ！ と扉を開ける。
イーサンは落ち武者の格好だった。

マリ「うひゃあぁー!!」

(マジ)

ファ「良い出来じゃないか？ イーサン」

マリ「(え〜〜)」

イー「(え〜〜)」

モニター室も

エミ「(え〜〜)」

ナギ「(え〜〜)」

ルミ「(え〜〜)」

全く空気を読まない発言だった。
怖くなくても怖がるものだろう……

(イー)

うわぁ……

気まずい……

ファ「さて、次へ行こうか」

マリ「う、うん……」

イーサンを無視して進んで行く。
マリはイーサンに振り向くと、ゴメンのポーズをした。

モニター室

エミ「全然ダメじゃん」

ルミ「マヤさん、準備を」

マヤ「了解！」

廃村の井戸の中に足場を作り、ファントム達を待っているマヤ。長い黒髪のカツラをつけており、さながら貞 みたいだ。

井戸の縁に御札が置いてある。

が、ここで終わらずプランではないので、掴もつとした瞬間に繋がっている糸を引き、ファントム達に井戸を覗いてもらう。

ルミ「あと20Mです」

マヤ「よし」

糸を引く準備をする。

ファ「さっき……」

マジで怖がってなかった？」

マリ「うっわ……」

女の子なんだから、怖がっても良いじゃん」

ファ「あ、ああ。」

そうだな……」

(マリ)

ヤバイな……」

もしかして気づいてるのかな？

ファントムの事だし、気づいてても不思議じゃない……」

……
そうだ！ 心を読み取ろう！

ファントムに集中する。

しかし何も考えてないのか、何も感じ取れない。

(マリ)

……
ダメだ……」

やっぱり幽霊が弱点って嘘なのかな……」

ファ「……………」

お！ あれじゃないか？」

ファントムが指差した井戸。
御札が置いてある。

ファ「アツサリしてんな」

ファントムが御札を取ろうとしたら……

ひょい

っと、井戸に入ってしまった。

ファ「な！」

咄嗟に井戸を覗く。

プラン通り、貞 っぽいマヤがいた。

マリ「イヤアアア!!」

(マジ)

ファ「マヤ、御札を取ってくれ」

マリ「(え〜〜)」

マヤ「(え〜〜)」

モニター室も

ナギ「(え〜〜)」

ルミ「(え〜〜)」

「エミ」てかさっきと同じ感じじゃん！
デジャブか！」

その後……

モトウブの炭鉱……

ニューデイズの湖……

そこでもファントムは、怖がる感じが無かった。
1人で行かせても……

リトルウィング

肝試し終了後……
皆が事務所で宴会している時……

居住区の死角でルシフェルが、作戦を発案した4人にボコられていた。

ルシ「ま、待ってって！

俺のせい……ぐお……

じゃないってば！

(TOT)「

マリ「そうだね！

お兄さんに頼んだアタシがバカだったわ！」

ナギ「とんだ時間の無駄だったぞ！」

エミ「同じリアクションしか出来なかったじゃん！」

ルミ「そこ？」

ルシ「ちょ、ちょっと待でい！

考えがあるばあ！

”(ノ<>(ノ「

1時間後……

ファントムが宴会から帰って来て、マイルームを開けた時。

ファ「ギャアアア!!」

ファントムは廊下で失神してしまった。

廊下の奥から、ルシフェル達 came。

エミ「? 何したの?」

ルシ「部屋を見てくれ」

扉を開けると、オキクドウクがフワフワと浮いていた。

マリ「うわぁ！」

ナギ「うわぁ！」

ルミ「え？　これで気絶したんですか？」

ルシ「ああそつだよ」

エミ「いやいや、何で突然？」

肝試しの時は全然だったじゃん」

ルシ「恐らく……」

ファントムはあらかじめ知ってる事には驚かないんだ。

あのオキクドウクは部屋を開けて俺が仕掛けた。

ファントムはオキクドウクを持ってないし、誰かが部屋を開けるとは思わないだろ？」

だから素のファントムが出たんだ」

マリ「でも幽霊役の配置をファントムは知らないよ」

ルシ「……………」

これも、憶測なんだが……

ファントムは仲間の前で弱味を見せないんじゃないか？」

「？」

ルシ「いや、弱味じゃなくなるんだ。

……仲間を守るのがファントムの信念。

だから仲間の前で弱味が消える。

守れる様になる為……

……

本当の弱点は……

それ程までに大事な……

仲間なのかもな……」

く英雄さんの弱点 2く（後書き）

そろそろテストや、資格試験が来る……！

ちょっとペースが落ちるかもしれません。

～亜空間渡航 1～（前書き）

リクエストストーリーです。

なんか、一気に現実味が出てきた。

凄く変。

「亜空間渡航 1」

“狂神の信念”事件が始まる1ヶ月前。

ファントムとエミリアの亜空間渡航の話。

「エミ」亜空間ホール安定、機体異常無し、突入まで1分」

コックピットで、亜空間機体の状態を調べるエミリア。

ファントムは特にする事も無く、椅子に座っていた。

いや、ファントムは既に機体、亜空間のシステムを頭に入れていたが、まだ自分の能力を話していない時……

手伝わたら能力が知られるので、面倒は避けている。

エミ「待っててね、ミカ」

目的地は……

安定しているマガハラ。

亜空間で再現すれば、行けると考えてるのだ。

しかし、ファントムは上手くいくとは思っていなかった。

旧文明時代では、他次元から資源を獲得する事は多かったが、次元その物を具現化させるなんて聞いた事がなかった。

ましてや、安定しているとは言えマガハラ。

良くて別次元に飛ぶか、悪くて次元に閉じ込められるか……

そんな結果しか、ファントムは予想出来なかった。

エミ「そろそろ入るよ！

一応何かに掴まって」

ファ「ああ」

機体が物凄い速さで動いた。

ゴォォオン！

船が不時着した。

ファ「！？ どうしたんだエミリア！？」

エミ「いてて……」

どこかに落ちたみたい……」

ファントムはエミリアを立たした。

ファ「電源は点いているが……」

……
座標はマガハラじゃないな……」

船の扉を開け、辺りを見渡した。

外は明るく、暑かった。
モトウブの気候に似ている、地形も似ている。
白っぽい岩と山がどこまでも続いている。

エミ「うん、外傷は無いみたいだね」

いつの間にかエミリアが機体を調べていた。

ファ「なら早く戻ろう。

ここは暑い……」

エミ「そうだ……

バババババン！！

銃声に身を強張らせるが、ファントムはエミリアに走っていき、伏せさせた。

エミリア「きゃあ！ 何！？」

ファントムはエミリアを船に隠れさせた。

ファ「離陸の準備をしてくれ」

ファントムは隠れて外を確認した。

前方向の岩に、口元を布で隠した男がいる。
手にAK-47を所持している。

ファ「実弾？ フォトン技術が無いのか？」

ファントムはスコープ付きM16をトランスし、男の肩を撃った。
男が倒れると、他の岩陰から別の男が撃ってきた。

ファ「チッ……！」

エミリア、早く出発してくれ！」

エミ「フォトン残量が0……!?
ダメ、空気中からも吸収出来ない……
……離陸不可能……」

ファ「何だと!?」

また外から撃ってくる。

ファ「クソ……！」

エミリア!」

ファントムが対弾コートをトランスし、エミリアに渡した。
かなり分厚い布だ。

ファ「頭から被るんだ!

俺が良いと言っただけそのままだ!」

エミ「わ、わかった!」

再び外を覗き、射撃する。

急所は外してあるが、相手側が後退している。

少しすると、撤退していった。

ファ「フウ……」

もう良いぞエミリア」

エミ「終わったの？」

ゆっくり防弾コートを置いた。

ファ「ああ、だがいつ戻るかはわからない。
船をステルスにして移動しよう」

外に出ると、船を透明にした。

エミ「うん……」

エミリアはフォトン系の銃を調べていた。

ファ「使えないんだろ？」

最悪な事に、フォトンが無い次元に来たようだ……」

エミリアは銃をしまった。

エミ「……どうするの？」

……「これから……」

ファ「どうしたもんかな……」

ここまで次元が違くとグラールには連絡出来ない……
たとえ来たとしても……俺達の二の舞だ。

……

とりあえず、別に隠れる場所が必要だ。

町を探そう」

2人は歩き出した。

現在位置

地球

中東 タジキスタン

西暦2012年 8月2日

国内状況

アルカイダの第二組織が潜伏中。
アメリカ海兵隊が連日戦闘を繰り返している。

一方、地獄では……

魔神塔

最上階 魔神の部屋

悪魔「ルシフェル様。
例の計画の重要人物、ファントムが地球に遭難した模様です」

ルシフェルはヘッドホンを付けて、演歌を歌っている。

悪魔「ルシフェル様！
聞いてますか！？」

堕ル「聞いてる聞いてる。
今後演歌界がどうなるかだろ？」

悪魔「ちげーよ！！
ヘッドホン取ってちゃんと聞けや！」

堕ル「わかったって。
全く……よりにもよって地球か……
キリストの血筋に会いたくないな
ま、機会があつたら強制的に戻すか」

また演歌を歌いだした。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e

↳ 亜空間渡航 1↳ (後書き)

実際、亜空間渡航を行った時何処へいったんだろっ？
公式設定がわからない以上、詳しくは書けません。

すみません。

く亜空間渡航 27 (前書き)

だんだんと長くなっていく……！

く亜空間渡航 2く

ファントムとエミリアが歩き続けて、10分程経った。

前方にかなり大きめな野営地が見えた。

小高い丘に作られており、戦略的には良い場所だ。

ファ「性能の良い武器を使ってるみたいだな……
さっきの奴らとは違うようだ」

エミ「でも言葉が通じるとは思えないし……
別の場所に行こう」

ファ「でもあれ見るよ」

ファントムの指差したテントに文字が書いてある。

ファ「グラールの文字に似てないか？」

エミ「言われてみれば……」

“アメリカ…海兵隊”
って書いてあるのかな？」

ファ「軍隊なのか……？」

まあ、武器を仕舞ってれば撃ちはしないだろ」

ゆっくり近づいて行くと、案の定……

銃を向けられた。

M4カービンモデルだ。

兵士「おい！ お前ら何処から来た？」

ファ「ん？ グラールの言葉に似てるな……」

エミ「話したら通じるんじゃない？」

兵士「聞いているのか！？」

お前ら何処から来た？

英語が喋れるんだろ？」

ファ「英語……」

そついう言い方をするのか……

……え〜と……」

(ファ)

グラールから来たと言ったって信じるわけないよな……
どういふ風に言ったら……

兵士「！ 伏せろ！」

兵士がファントム達の後ろに向かって、発泡した。

エミリアを伏せさせ、後ろを確認する。

AK-47を持った数名の兵士が、野営地に攻撃している。

海兵隊側から増援来ている。

ファ「伏せてろ」

エミリアを隠す様に立ち、ファントムも銃撃を始める。
もちろん急所には当てない。

数十秒程で撤退していった。

兵士「アルカイダじゃないようだが……
何故銃を？」

ファ「私物だ。

それより、アイツらは？」

兵士「……………」

ついてこい」

兵士は野営地の中に入っていく。

エミ「信用された？」

ファ「たぶんな……………」

エミリアを立たせると、野営地に入ってしまった。

野営地内 テント

兵士を追って中に入ったテント。
作戦用のテントみたいだ。

ジエ「俺はジェイク・アンダーソン少尉。
誇り高きアメリカ海兵隊員さ。
君達は？」

ファ「ファントム・レガス」

エミ「エミリア・ミュラーです」

ジエ「珍しい名前だな。
何処の国だ？」

ファ「すまないが、言えない事情がある」

ジエ「ハハ、戦場で言えない事ね……」

ファ「とりあえずここら辺が静かになれば、俺達は元の場所へ帰る
準備が出来る。」

いつ戦いが終わる?」

ジエ「戦争終結が目的か……

まあ喜べ、敵側は虫の息。

さっきの戦闘もチマチマ戦力を削ってるだけ。

近い内に終わると思うぞ」

そう言うと、外へ出ていった。

エミ「詮索しない……?」

ホントに信用されてるみたいだね」

ファ「まさか、戦場で全く知らない奴を信用するわけがない」

エミ「でも詳しい事聞かないし……」

ファ「……」

確かに……な……

詮索しないのは何故だ?」

テントの入口が開き、ジエイクが顔を出した。

ファ「!!」

エミ「うひゃあ!」

ジエ「確かに完全には信用してないさ。

……でも、困ってるなら助ける。

当然の事だ。

詮索されると困るんだろ？ だったら聞かない」

ファ「……………」

エミ「……………」

ジエ「その代わりに言ったら意地汚いが……

ファントムには俺達の手伝いをしてほしい」

ファ「うわ、マジで意地汚い」

ジエ「実は君を見込んで……

この後の戦闘に参加してほしい。

ここから北10kmのところにアルカイダの本拠地がある。

今日一気に叩けば、戦争とテロからおさらばさ……

30分後に出発するからな」

またテントを出ていった。

ファ「参加決定かよ」

エミ「まあいざこざが終われば、早く船を調整出来るじゃん？
ガンバ！」

ファ「俺は殺し屋じゃない……
……これ持っておけ」

エミリアにM92Fを渡した。

エミ「重っ!!」

ファ「男臭い兵士達だ、襲われないとは限らないだろ?」

エミ「それってどういう意味?」

イタズラっぽく聞く。

ファ「変わった事を聞くな……
エミリアは可愛い方だと思うぞ」

エミ「フウ」

ファ「フウじゃねえよ」

ファントムは必要な銃をトランスすると、テントを出ていった。

地獄

魔神塔 廊下

堕天使が名簿を見ながら、歩いていた。
悪魔が後ろについてきている。

堕ル「そろそろ“あの人達”を刑から出させよう。
でしゃばらせないでね」

悪魔「ルシフェル様、早すぎでは？」

堕ル「僕がどんなに“堕メ”野郎か知ってるでしょ？
早め早め」

名簿を悪魔に渡すと……

ルシ「さあーと！
部屋でエル ダイやるかな！」

t o b e c o n t i n u e

く亜空間渡航 27 (後書き)

出来るだけ次で完結させたいです。

堕天使の……

“あの人達” って言葉。

一応これも、新シリーズに繋がります。

く亜空間渡航 3く (前書き)

ん？ なんか……

強引かつ、グタグタだぞ。

アメリカ海兵隊野営地から北に10km……

アルカイダの本拠地を見渡せる丘から、ファントムとジェイク率いる分隊が観察していた。

ジェイクは分隊長のようだ。

分隊名はブラボー。

本拠地は、ファントムが予想していたよりも大きかった。

全員銃を点検する。

ファントムはM4と、サイドアームにM1911A1を持っている。

ジェ「私物ねえ……」

ファ「詮索はしないんじゃないのか？」

ジェ「しないさ……」

だが、その銃を違法で手に入れたなら別だ」

ファ「アンタ達から奪ったとでも？」

俺は悪者じゃないんだぞ」

ジエ「例え話さ、怒らないでくれ」

ジエイクが通信器をONにする。

ジエ「チャーリーは南から射撃を。

俺達ブラボーは北から攻める。

アルファは2組に別れて、側面から逃げるゴキブリを撃て。

良いか？ 現指導者は出来るだけ殺すなよ？

よし！ 作戦開始だ！」

その声が合図で、南側のチャーリーが攻撃を開始する。

ジエ「俺達も行くぞ！」

ブラボーの半分は丘を降り、もう半分は対人用M82A1で狙撃。
ファントムは前者の隊についていく。

基地北側の入口に着いたブラボー。

ファ「ジェイク、現指導者の顔を知らないんだが……」

ジェイクは何故か通信を切って、言葉を返した。

ジェ「あくまで、出来るだけだ。
別に捕らえなくても良い」

ファ「じゃあ何であんな命令を？」

ジェ「俺達のトップは、殺しても殺さなくてもどっちでも良いらしい。
簡単に嘘を隠せる国だから……他国に秘密にしている兵器や技術も山程ある。

だから、ファントムは制圧の事を考える」

ファ「……………」

ヒトの生死ってのは……………」

国が決める物じゃないだろ……」

ジェ「わかってる。

どんなに悪党でも、短絡的に殺したら駄目だ。

……だが、軍隊に入る奴らのほとんどに愛国心がある……
アルカイダは祖国を……一方的な思想の為に攻撃したんだ。
俺を含めて、軍人のほとんどが潰したがっている」

ファ「……もしかして」

ジェ「ああ……この作戦で、アルカイダは全滅させる。

ブラボー、チャーリー、アルファには既に抹殺許可を出している。
滞り無く抹殺が完了する。

国には適当に話とこう、前指導者を殺した時も……そうだった……」

ジェイクは入口から出てきた兵士の頭を、躊躇無く撃った。

ファ「……！……」

ジェ「突入するぞ！」

ファントムを残して、ブラボーは突入していった。

ファ」……………

ジエイク達は国の為に戦っている。

その気持ちは強くなって、あんな風に……

……………

俺は、仲間の為にああなれるか？

何かに背いて……

割りきって……

仲間を守るのか？

……………

……………

！！ 何考えてるんだ俺は……

今は……死者を出さない様にするんだ」

基地に入ると、武装解除しながら進んでいった。

何人が死亡している兵士がいたが、今のところファントムは1人も殺していない。

丁度、基地中心部に着いた。

大きな建物があり、指導者がいるとするならここだろう。既に建物内では、戦闘が始まっている。

ファントムは立ち回り易いM1911A1を構え、玄関を開けた。

ロビー内にはかなりの死体があった。

海兵隊側の死体は1体も無い。

ファ「ほう…流石隊長だな、損害を出さずここまでやるとは……
……呑気に関心してる場合じゃないか……」

2階に上がってみると、また死体の山が……

ファ「オイオイ、敵は虫の息だったんじゃないのか？
何でこんなに多いの？」

つと気づいた。

銃声が止んでいる。

ファ「……………」

廊下を進み、奥の扉を少し開けた。
大きな部屋に海兵隊の死体。

ジェイクが黒人系のヒトに、銃を突きつけられている。

ファ「！」

扉を勢い良く開け、銃を持つ黒人の頭を撃ち抜いた。

ジェ「ファントム……………！」

ファ「どうしたんだ、これは……………」

ジェ「ブービートラップを仕掛けられて、俺だけって感じた。
それより……………」

ジェイクはファントムに撃たれた黒人を見た。

ファ「こいつが指導者か？」

ジェ「……そうだ。

何故撃つたんだ？」

ファ「危機的な状況なのに気にするか？

アンタ達が国の為に戦うのと同じだ」

手を差し出すファントム。

その手を取るジェイク。

ジェ「ファントムも、何かの為に戦うのか？」

ファ「無用な詮索だ」

犠牲を出しながらも、アルカイダは壊滅。

野営地に戻り、海兵隊達は荷物をまとめ始めた。

エミ「おかえりファントム」

M92Fを差し出す。
それを取るファントム。

ファ「まだグルールには帰れないんだ。
帰るまでその言葉は言つな」

話をしていると、ジェイクが近づいて来た。

ジェ「今日は助かった。
これで家に帰れるな」

ファ「アンタ達もな……」

ジェ「……………」
俺、除隊しようと思つ「

ファ「？」

ジエ「自分は…間違った考え方はしてないと思っていた。けどそれは、アルカイダの奴らと同じだ…そんな奴が国を守れるとは到底思えない」

ファ「……………」

ジエ「ファントムが気づかせてくれた。君から感じられる、信念からだと思う…悪い…短い間だったが、柄じゃねえな。……………じゃあな」

ファ「……………ああ……………」

野営地から離れ、船の場所に戻った。

エミ「なんか随分と親しくなってたね？」

ファ「そうか？」

船のステルスを解除し、中に入った。

エミ「あれ？ フォトン残留がMAXなんだけど……」

ファ「じゃあ来た時は故障してたのか？

何だよ……」

エミ「まあまあ、これなら帰れそう！」

フォトンを80%使い、亜空間を発生させた。

この事故から1週間後……

ニューデイズのティの花畑で……

ファントムはレッドタブレットを拾った。

地獄

魔神塔 魔神の部屋

一方のテレビには

エル ダイ……

もう一方には

ファントム達の船が映っていた。

墮ル「故障？ 僕がワザワザ地球に干渉してあげたから、フォトンがMAXなんだよ……」

……ああ！ イー ックが落ちた！」

部屋をノックして悪魔が入ってきた。

堕ル「いいノックだ……みたいな！」

悪魔「ルシフェル様、例の罪人達は悪人界に移しました」

堕ル「お！ ありがとう！」

1つ1つ仕事をこなしていく……

堕メ野郎でもやれば……

…… ああ！ またイー！ ツクが落ちた！」

↳ 亜空間渡航 3↳ (後書き)

やっぱり……亜空間渡航の時に何処へ行ったんだかが不明。

もっと創造力を鍛えなければ……

く墮天使の計画く（前書き）

懐かしい奴が出ます。

↓墮天使の計画↓

地獄

地獄街 入口

シヌ「地獄……」

堕ル「そうだよ。

積もる話は歩きながら」

堕天使は塔に向かって歩き始めた。

(シヌ)

………ついていくか………

酷く寒い………

シヌの第一印象はそうだった。

そして殺風景だ。

建物、道路、標識、信号……普通の街にある物が揃っているのに、殺風景に感じる。

(シヌ)

……

人間がいない……

人間だけが足りていない。

考えていると、墮天使が話し始めた。

墮ル「まず、君は僕のお陰で地獄での刑期は無い。何故かわかるかい？」

シヌ「さあな」

墮ル「君には“僕達”の仲間になって……

“新たな神”になってほしい」

シヌ「すまないが、言っている意味がわからない」

墮ル「ここは地獄。統治者は僕。

それと対を成す天国だってある。

統治者で対を成すのは神だ」

あからさまに、シヌの顔色が悪くなる。

シヌ「神なんていない。

次言ったら殺す」

堕ル「まあまあ、とにかく君も僕も、神を憎む者同士。
協力してほしい」

シヌ「……まるで神が実在するような言い方だな？」

シヌはAフォトンを纏い、堕天使に殴りかかった。

ガシ

シヌ「!?!」

堕天使はシヌの拳を素手で受け止めた。

堕ル「君が怒るのはわかる……
恋人を殺したあの惨劇、信じていた神に裏切られたと思った程……
けど神は実在する。
非情な神は、飄々と生きているんだ……」

シヌ「……黙れ！」

腕を振りほどき、2本の黒餓を出す。

堕ル「今のところ神を殺せるのは、Aフォトンを使える君だけだと考えている。
低レベル悪魔を殺せるんだからな……」

魔剣レーヴァティンを2本出す。

シヌ「！ ファントム君の兄の……」

堕ル「元々は僕の物さ。

そしてこの……

デモンズディザスターが……真の姿」

ザシュザシュ！

一瞬にして、シヌの両腕を斬り落とした。

シヌ「何……！？」

堕ル「まだ亜空間能力は使えるから、痛くないだろ？」

……選択肢は2つ。

“僕達”に協力するか……

地獄で意味無く永遠に存在するか……

……
どうする？」

シヌ「クソ……」

(シヌ)

……！？……

体を亜空間で治せない……

コイツの仕業か？

……

……

シヌ「呼び出し？」

堕ル「街でも観光しててよ、飽きたらあの塔の最上階に」

堕天使は背中から黒い羽を出し、暗い空へ飛んでいった。

見えなくなると、シヌの腕が治った。

シヌ「俺は……」

？「父さん？」

後ろから聞き覚えのある声。

そして、シヌを父さんと呼ぶのはたった1人しかいない……

シヌ「……カムハーン？」

カム「何で父さんが？」

アナタは不老不死では？」

シヌ「……ンフフ……」

話せば長いぞ……」

これまでの事を全て話すと……

カム「あの餓鬼がフアントム!?
クソ、やはりあの時殺すべきだったんだ!」

シヌ「うるせーうるせー。
お前が弱いからだ」

カム「父さんだって倒されたのでは?」

シヌ「過言じゃないな。
それよりお前は何してるんだ?」

カム「私は地獄で、幹部相当の悪魔なんです。
今は見回りなんです」

シヌ「へえ……
つて、ええ!?
人間が悪魔!?」

カム「ええ、よくある事なんですよ。
最近は……
ハウザーとヘルガって言う輩が悪魔に……」

(シヌ)
悪い奴程、悪魔になるのか……？

カム「でも父さんは違うようですね……」

シヌ「？」

カム「父さんは、墮天使が考えている計画のメンバーなんです。参加すれば神、またはそれを討つ存在になるはずです」

シヌ「計画とは何だ？」

カム「神を討つ存在を集めて、戦争を起こすのかと……
しかし、今集められているメンバーは条件があると言ってる……」

シヌ「条件？」

カム「これ以上は存じ上げません。
他は私の管轄ではないなので……
では、私はこれで……
またお会いしましょう」

カムハーンは街に消えていった。

シヌ「……堕天使は何を考えてる？」

堕天使が飛んでいった空を見た。

暗くて乾いた空だった。

く墮天使の計画く（後書き）

ホント、ぶっ飛んでいる内容だと思います。

『貴族墮ち 1』(前書き)

リクエストストーリーです。

ユニバース主人公

バアル・セレンサーの話。

くどいけど、シリーズものです。

過去設定も書かないといけないので御勘弁を……

「貴族墮ち 1」

現在

モトウブ とある埠頭

夜中

黒い車が数台あり、スーツを着た男達が何かをしている。

スーツケースを交換し、中を確認。

男1「確かに受け取った」

男2「こちらも、取引成立ですね」

一方のケースには大金が……
もう一方は白い粉が……

男2「また頼みます」

男1「こちらこそ……」

男達が車に戻ろうとすると……

? 「動くな！」

倉庫同士の間から、ガーディアンズ制服を着た……
機動警護部隊長

バアル・セレンサーが銃を構えて出てきた。
カノン・クオリアが男達を捉えている。

男1 「ガーディアンズ……！」

男2 「まあ慌てないで下さい。

彼1人で何が出来るんですか？」

バア 「俺1人？ 何を言ってるんだ？」

ライトが辺りを照らす。

近くはガーディアンズに囲まれている。

男達は素直に手を上げた。

手錠をかけられ、護送車に押し込まれる。

レオ「手伝ってくれてありがとう。バアル」

バア「レオ先輩。

同じ仲間同士ですよ？

この位当然です」

レオ「でも管轄外だ……」

バア「いいんです。

それにルシフェルからも頼まれて……

そう言えばローグスは？」

レオ「さっきの奴らの事務所だ」

バア「4年前なら有り得ないですよね……

ガーディアンズとローグスが協力なんて……」

レオ「時代は変わるもんさ……

……今日は助かった。

後で飲みに行こう」

バア「あ……すみません。

教官からの仕事があつて……」

レオ「まだ教官って呼んでるのか？

いまは総裁だろ？」

ライア総裁」

バア「わかってますよ。

僕はこれで……」

そう言って、夜に消えていった。

Gコロニー

ガーディアンズ 総裁室

ライア「やっと来たな？ バアル」

バア「遅れてすみません」

総裁室で椅子に座るライア。
若干、ご立腹だ。

バア「そう怒らないで下さい。
仕事だったんですから」

ライ「知ってる。

ルシフェルとモトウブ支部からの要請……
人気者だね」

バア「そんな言い方しないで下さい。

偶々僕があ事務所に詳しくて、偶々ローグスとガーディアンズの
利害が一致した……」

ライ「どつちも治安が大事だからね……

……ああ！ 仕事の話忘れてた！」

机の引き出しから、任務詳細書を出した。
バアルが受け取る。

ライ「ニューデイズのある貴族から護衛任務だ」

バア「ある貴族？」

ライ「聞いた事あるだろ？

ディグニテイ家」

バア「!!」

ライ「4種族の500年戦争を治めた名門家。

その29代目当主……

レディ・イヴ・デイグニティ嬢が、幻視の巫女……つまりカレンと会谈をするらしい。

テロが起こらないとは限らないし、護衛が必要なんだ。

カレンは……アイツは大丈夫か……

……

バアル、聞いているのか？」

バアルは俯いたまま喋らない。

ライ「？ バアル？」

バア「……

すみません、教官。

この任務、降ります」

ライ「ハア!？」

どういう事だよバアル？」

既に総裁室を出ていた。

ライ「？ 珍しいな……」
アタシの任務を断るなんて……」

ガーディアンズ本部

ロビー

円になるように配置してあるベンチに、バアルは座っていた。

バア「ハア……」
ディグニティ家か……」

ため息をつく。

ルミ「あ、バルさん！ お久しぶりです！」

バルが顔を上げると、ルミアがいた。

バア「ルミアちゃん……」

ああ、久しぶりだね……」

ルミ「ちゃんは止めて下さい。
それより、元気無いですね？」

バア「気のせいだよ。」

……どう？ ファントム君とは？」

ルミアが顔を赤くし、慌てる。

ルミ「わ！ 今その話は……」

バア「ゴメン……」

ん？ 今？」

ルミ「今ファントムさんがここに来てるです。
相談は…今はちょっと……」

ルミアの恋の相談相手はバルだった。
彼女はいないが、女心を良く理解しているのだ。

バア「そうなんだ……
ファントム君は何しに？」

ルミ「ライア総裁から任務の話は聞きました？
デイグニティ家当主の護衛は、バルさんと私とファントムさんな
んです」

バルが任務詳細書を読み直すと、メンバーの欄に書いていた。

バア「ホントだ」

ルミ「もうすぐで出発ですから、急いで下さいね」

走って停船所に向かうルミア。

バア「ちょ……僕は……！」

……行っちゃった……

……

仕方がない……」

携帯を出し、ライアにメールを打つ。

宛先 ライア総裁

件名 さっきの仕事

本文 やっぱりします。

バア「こんな感じで良いか……

……

でも、乗り気しないな」

携帯を仕舞うと、速歩きで自室に向かった。

ガーディアンズ 停船所

ガーディアンズ専用の船には、既にファントムとルミアがいた。

ルミ「あれ？ バアルさん、制服は？」

バアルはゴシカリアシリーズの白を来ていた。

バア「イメチェンさ。

それより、ファントム君とは初めて会うね」

ファ「ああ、でも兄貴から話は聞いている」

バア「ハハハ、どうな話を？」

ファ「掴めない奴だつて……」

ルミ「言えてますね……」

バア「僕の悪口かな？」

船は動き出し……
ニューデイズへ向かった。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e

く貴族墮ち 1 (後書き)

バルは

敵の時、俺

仲間の時、僕

特定の時、私

と言います。

特定の時、今後わかります。

女性の気持ちを良く理解出来るのは、出生や過去の経歴に関係しません。

ガーディアンズ側は、バルの経歴を完全に把握出来てません。

く 貴族墮ち 2 (前書き)

バルの過去、ドロドロしているな……

く 貴族墮ち 2

ニューデイズ

大都市 ライエン

大都市ライエンは、ニューデイズで2番目に大きな都市。

都市の造りは地球で言うイタリア風で、デイグニテイ家の住まいも例外ではない。

バル達は近くの停船所に船を止め、デイグニテイ家の住まいに向かった。

都市の風景を見ながら歩いていると、いつの間にか着いていた。

ルミ「うわぁ……」

大きなお家……」

ファ「家？ 宮殿の間違いだな」

まさに宮殿だった。

庭だけでも凄い面積だ。

バア「（変わらないな……）」

ファ「？ 何か言ったか？」

バア「いや…何も」

ルミ「……て言うか……何でバアルさんは、顔に仮面を？」

バアルは、額から鼻を隠す仮面をつけていた。

ファ「仮面舞踏会しに来たんじゃないんだぞ」

バア「仮面葡萄会？」

ファ「舞踏会だ！」

騒いでいると、紳士服を着た男が来た。

ある程度近づいて、バアル達の事がわかった様だ。

男「ガーディアンズの方とリトルウィングの方ですね？」

ルミ「はい、そうです」

リゼ「私は

リゼン・シュレイド。

デイグニティ家に仕える執事です。

ルミア様とファントム様はこちらの執事に……」

リゼンは、いつの間にかいた違う執事を指す。

リゼ「バアル様は私に……

バア「回りくどいな。

私の事は呼び捨てにしたらどうだ？」

ルミ「私って……？」

ファ「何だ？ 知り合いなのか？」

リゼ「いえいえ、そんな事はないですよ。

バアル様、レディ様がお会いしたいと……」

バアルは顔をしかめた……

バア「……………」

……わかった。

着いていこう……」

リゼ「ありがとうございます。

君、その御二人には粗相の無いように」

執事「はい」

執事はファントム達を連れていく。

ファ「後でな……」

バア「ああ」

リゼ「随分と慕われいるんですね？
貴族落ちが……」

先程とは打って変わって、物凄く冷たい声だった。

バア「……………」

リゼ「その服……」

レディ様への敬意と受け取りますが……

その仮面……

私達に気付かれなくても？」

仮面を外すバアル。

リゼ「大体、貴方を護衛に指定したのは私達なんですよ？
もう少し頭を使ったらどうです？」

バア「何故私に護衛を？」

リゼ「変わりませんね……」

血族間で“私”と使う事……」

バア「質問に答えろ」

リゼ「フフ、強いて言うなら……」

貴方がお強いからですかね？

……お喋りはここまで。

レディ様は心底会いたがってますよ」

リゼンは宮殿へ歩き出す。
ついていくバアル。

デイグニティ家 宮殿
当主

レディ・イヴ・デイグニティ自室前

リゼ「失礼の無い様に」

バア「……………」

リゼンが扉をノックする。

レディ「入って下さい」

リゼ「失礼します」

扉を開け、室内に入る。

レディの部屋はピンクを基調としており、ベッド、机、イス、ぬいぐるみ……
全てピンクだ。

レディはイスに座っている。
スラリとしたドレスを来ている。勿論ピンク。
髪もピンクで、セミロング。
ニューマンだが、肌が青白い。

バア「！」

レディ「驚いた？
ニューマンもニューマンになるんだね……」

バア「レディ……」

リゼ「様を付ける。
貴族墮ちめ……」

レディ「リゼン、彼はもう一般人ですよ。
その口調は良くないわ。
それと、下がって結構です」

リゼ「失礼いたしました。
私はこれで……」

そう言うと、部屋を出ていった。

バア「……………」

リゼ「お兄ちゃん」

リゼンが出ていくのを確認すると、バアルに抱きつくレディ。

レディ「何年振りかな？」

バア「5年前以来です」

レディ「敬語は止めて、昔みたいに喋って」

バア「貴女とは他人なんです……
昔みたいには……」

レディ「兄妹にそんな関係ないわ」

バア「兄妹……」

あの時、そんな関係ではなかった……」

レディ「“恋人”でも同じよ」

抱きつくレディを離す。

バア「リゼンも言っていた。

私は貴族堕ち……」

この土地にいる事すら失礼に当たる」

バアルは部屋を出た。

レディ「お兄ちゃん……」

宮殿内 大応接室

ファントムとルミアがイスに座っている。
ファントムはテーブルの葡萄を一粒取り、口に放り込む。

ファ「これはホントに葡萄会になりそうだ」

ルミ「何を言ってるんです？
それより、バアルさんの事……」

ファ「ああ、何隠してたか……
俺が思うに…バアルはこの家の奴だ」

ルミ「でも名字はセンサーですよ？」

ファ「偽名じゃないのか？
まあ、詮索し過ぎるのは良い事じゃないか……」

また葡萄を摘まむと……

ガチャ……

っと、バルとリゼンが入ってきた。

リゼ「まだ準備に時間がかかりますので、もう暫くお待ちを……」

バルがイスに座る。

リゼンは大応接室を後にした。

……

……

……

バル「ファントム君……」

少しは気づいてるよね？」

ファ「さあね」

バル「ルシフェルの弟だ……僕に疑問位あるはずだ……」

ファ「無いわけではない……
だが聞くほどでもない」

バア「……ルミアちゃんはどっかな？」

ルミ「え！ 私！？」

……そ、その……」

バア「……」

このまま黙ってても重いよね……

……
話そう……僕の過去を」

t o b e c o n t i n u e

く 貴族墮ち 2 (後書き)

リゼン・シュレイド

19歳

デイグニテイ家に仕える執事。

デイグニテイ家の血は流れているが、ある掟により執事に……

バアルを貴族墮ちと呼び、嫌悪感が異常。

レディ・イヴ・デイグニテイ

20歳

4種族の500年戦争を治めた貴族の

デイグニテイ家

第29代目当主

バアルとは血を分けた兄妹。

しかし、5年前までは恋人の仲だった。

自分の髪色のピンクを好んでいる。

く 貴族墮ち 3く (前書き)

デイグニテイ家の掟

- ・ 当主は、現当主が死亡した1ヶ月後から決めなければならない。
 - ・ 当主を継承出来るのは15歳から。
 - 男女は問わない。
 - ・ 原則、当主継承順位一番はデイグニテイ家。
 - ・ デイグニテイ家は4種族の500年戦争を終結させた……自由の象徴。
 - 原則、他人の思想に便乗してはならない。
 - 原則、他人の思想を否定してはならない。
 - ・ 当主と愛人の子は、他に子息がない場合のみ当主になれる。
 - ・ 上記以外の愛人の子は……
- 貴族墮ちと呼び、血族ではなくなる。

く 貴族墮ち 3く

7年前……

ニューデイズ ライエン

デイグニティ家宮殿

戦闘訓練所

元々デイグニティ家は、500年戦争を治めた名門貴族。
勉強から戦闘まで英才教育を受ける。

14歳の頃……

僕は妹のレディヤリゼン、他の親戚の中でもずば抜けて才能があっ
た。

訓練所では師範として教えていた……

リゼ「うわ！」

デイグニテイ家専用の紳士服を着たりゼンが、バアルに足払いされて床に転ぶ……

周りの訓練生から

「凄い……」と声が出る……。

男性は紳士服。

女性はドレス。

デイグニテイ家が教える武術は……

“威厳の中の強さ”

がコンセプトの為、戦闘服は紳士服とドレスになる。

リゼ「流石です……

バアル様……」

リゼン・シュレイド

当時 12歳

バア「リゼン、もう少し軽く呼んでくれ」

バル・ディグニティ

当時 14歳

バル「他に手合わせしたい奴は？」

レディ「ハイハイ！」

レディ・イヴ・ディグニティ

当時 13歳

バル「レディか……
どれだけ強くなった？」

レディ「見てのお楽しみ！」

いざ手を合わすと、意外に力が均衡した。
しかし、勝てるわけでもなく……
レディは仰向けに倒された。

バア「確かに強くなったな」

レディ「でしょ？」

レディを起こすと、訓練所の扉が開いた。

扉を開けた人物……

第28代目当主

アトラス・デイグニティ

ニューマン

当時 64歳

バアルとレディの実の父。

訓練所の空気が重くなる。

彼が怒っているわけではないが、何となく空気が張り積める気分となるのだ。

アト「今日も訓練に励んでるな……」

無理はするなよ……」

それだけ言って帰っていった。

しかし、良く耳に入る声で、60半ばの声とはほど遠く若々しかっ

た。

訓練終了後……

夕食を食べ、風呂に入った後、自室で空を見るバアル。

星が良く見える……

ガチャッと、いきなり部屋が開いた。
誰かはわかっていた。

バア「ノック位してくれよレディ……」

レディ「こっち見ないでよくわかるね？」

バア「ノックしないのはレディだけだよ。

……何しに？」

レディは答えずに、バアルの横につく。

レディ「同じ教育を受けてるんだから……

“相手の気持ちを読む”

……わかるんじゃない？」

バア「……………」

レディの唇がバアルの顔に向かう……

バア「……………ダメだ」

レディから離れる。

レディ「どうして？」

兄妹だから？」

バア「ああ……………」。

あ、いや…違う…
その……」

レディ「……お兄ちゃん……」

悲しい顔をする。

その顔を見ていらなかったのか、話し出す。

バア「私は……」

レディのお母様の子ではないんだ……」

レディ「!?!?」

バア「去年…レディのお母様が亡くなった時、父様が教えてくれた
……」

愛人の子だと……」

言うなと言われたが、この際話す」

レディ「……」

バア「父様はもう長くないんだ。

15歳になると私は当主になるが、愛人の子。
継承順位1位は私だが、そんな資格は無い……
次に継承順位が高いのはレディ……」

当主はレディに譲る。

そうになると、私達は恋仲にはなれないんだ」

バチンッ！

レディに頬を叩かれるバル。
予想外だったのか、反応出来なかった。

バア「うっ……！」

レディ「それでも父様の息子？
次期当主がそんなのでどうするの！？」

バア「だから私は……！」

レディ「父様の子供に変わりはない！
このまま跡を継ぐべきよ！」

バア「レディ……わかってくれ……
私達が戦争を治めた貴族……自由の象徴と言われているが、許されな
い事なんだ……！」

レディ「……でも私は……！」

急にか細い声になり、心配してしまうバル。

バア「……………」
私だってレディの事を愛している。
家族の意味ではない」

レディ「！」

バア「……………」

レディ「わかった」

バア「やっとわかつ……………」

レディ「当主になって、常識を変える！」

バア「ええ！？」

レディ「これなら問題無し！
私って頭良い！」

バア「ちょ……………」

……………
ハア、負けたよ……………」

イスに座ると、背もたれによしかかる。

レディ「じゃあ……！」

バア「……皆には秘密だ」

レディは抱きついてキスした。

これがバアルとレディの関係の始まりだった。

1年後……

28代目当主 アトラスの体調が崩れ始め……
すでに寝たきりの状態だった。

ディグニティ家
当主 アトラスの自室

その部屋でリゼンが何かを探していた。
当主は寝ている。

リゼ「クッ、どこにある？」

バア「何している？」

部屋の隅にバアルが立っている。

リゼ「!!」

……バアル様……」

バア「……まあ、家族のよしみだ……
すぐに出て行けば言わない……
私も聞かない」

リゼ「……」

ありがとうございます」

そう言つて2人は部屋を出た。

この時バルは、リゼンが何かを盗んだのを気づかなかつた。

数日後、当主アトラスは息を引き取つた。

葬式が終わつた数日後……

デイグニティ家の血族間で緊急召集がかつた。

大心接室

レディ「ねえ、今日何の集まり？」

バア「わからない。
召集をかけたのはシュレイド家らしいが……」

リゼ「皆さん、お集まり頂きありがとうございます。
今日は見てもらいたいものがあります……」

大きなスクリーンが運ばれ、映像が映し出される。

誰かの日記のようだ。

リゼ「これは亡きアトラス様の日記です。
ここを読んで下さい」

日記のある部分にズームされる。

そこには……
アトラスの愛人について書かれていた。

バア「！」

レディ「にれって……」

室内にいる血族達が騒ぎ始める。

リゼ「亡くなって数日しか経っていませんが……
これは伝えなければいけないのです」

レディ「ちょっと待って、父様は身の回りの遺品は残さないでほしいって遺書に書いていたわ」

リゼ「レディ様、これは一大事なんです」

(バア)

リゼン……

もしかしてあの時、父様の部屋で……

リゼ「ページを捲っていきます」

止まったページ……

そこには……

リゼ「書いてありますね……」

“貴女の子の名前は……バアル”と……」

より一層に騒ぐ。

バア「……レディ、もう会えないかもな……」

レディ「え？」

リゼ「今のところ、跡継ぎはバアル様ですが……」

愛人との子で良いのでしょうか？

私は来年、レディ様が当主になられた方が良いかと……

それとバアル様……いえ、バアルは掟により“貴族墮ち”にし、追放するのが……

バリン！

応接室の窓を割り、バルが逃走した。

リゼ「チツ、まだ話の途中なのに……」

レディ「お兄ちゃん……」

バル・デイグニティ

当時 15歳

(バア)

これ以上いざこざを起こさない為に、僕は行方をくらました。
まあ元々レディに跡を継いでもらうつもりだったが……

その後……

名前を変え、生活の為にガーデンズへ入った……

ガーディアンズ加入時

16歳

く 貴族墮ち 3く (後書き)

ホントはお母さんも同じにしたかったけど、無理があるので止めました。

ただでさえ、兄妹間の恋愛に無理があるので……

く 貴族墮ち 4 (前書き)

よく考えたら……

日常的じゃないな……

貴族墮ち 4

現在

デイグニティ家 宮殿

バルルの話を聞いた2人は、驚いている様子だ。それと同時に、疑問が浮かんでくる。

ルミ「何故リゼンは、無理してまでバルルさんを……」

ファ「確かに変だ。

自分が継ぎたいならレディにも何かしらしたはずだ。でもリゼンは執事に留まっている……」

それに……兄を追放しようとしたリゼンを置いとく意味がわからない……」

バア「すぐレディに手を出せば、かなり怪しくなるんじゃないか？ 5年も機会を見計らうのは変だが……」

リゼンを執事にしてるのは僕もわからない……」

ファ「……まあ今のところ、仕事で来てるんだ。

リゼンが何かするまでは、俺達が動く必要は無い。

……
問題はアンタだ」

バア「……………?」

ファ「今日の仕事で何も起こらなくても、いつか事件が起きるぞ……」

一瞬何かに気づいた顔をしたバルだが、元に戻る。

バア「何が言いたいんだい？」

ファ「まだ……………レディの事を想ってるんだろ？」

バア「……………」

ファ「別に俺が言う事ではないが……………
レディはアンタが守らないといけない。
一緒にいる必要はない、だが……………まだ忘れられないなら、解決するまでは傍にいる」

バア「……………」

わかってる……………

と言うか、いつまでも一緒にいたい……………

……………けど、僕は貴族堕ちだ……………レディとは住む世界が違う。
それ以前に、もう赤の他人だ……………」

真剣な顔をしていたファントムが、つまらなさそうな顔に変わる。

ファ「じゃあ勝手にしろ。

所詮その程度の男か……

……

（兄妹なのに……）「

ボソツと言って、葡萄を食べ始めた。

最後の言葉は、バルにだけ聞こえなかったようだ。

ルミ「ファントムさん……」

重い空気が漂う……

ガチャ

リゼンが部屋の扉を開けた。

リゼ「出発の準備が出来ました。
どうぞこちらへ……」

更に空気が重くなった。

デイグニティ家
宮殿前

宮殿前には豪華で、大きな船が止まっていた。

リゼ「既にレディ様は御乗車しております」

リゼンに導かれて、船に乗る。
船内も豪華だ。

リゼン「ルミア様はこの入口前を警護して下さい。
ファントム様はあちらの操縦室前の警護を……
バアル様はレディ様の警護を、私に着いてきて下さい」

バアルを連れて2階部分へ移動する。
奥の部屋まで連れていかれる。

リゼン「こちらがレディ様のお部屋です。
レディ様がお呼びした時以外は、部屋の前で警護して下さい」

そう言うと、向こう側の奥の部屋へ入っていった。
同時に船が動き出す。

バアルは近くのイスに座った。

バア「……………」
勝手にしろ……か……

……………」
僕はどうしたいんだ？」

船に備え付けられているコップに水を入れ、ゆっくりと飲み干した。

バア「フウ……………」

一息つき、コップを置いた。
しかしまた飲みたくなって、水を入れようとすると……

バア「ん？ ……何だ？」

足がふらつき、床に倒れてしまった。

バア「グッ……」

やがて力が無くなり、意識が飛んでしまった。

それを確認したかの様に、リゼンが部屋から出てきた。

リゼ「もっと用心深くないと……」

貴族堕ち……」

懐から手錠を取り出した。

バア「……ん？」

目を覚ますと、ピンクの部屋にいた。

イスに手錠で縛られている。

リゼ「気づいたかい？
貴族堕ち」

リゼンが目の前に立っている。
恐らくはバアルのだろう。

その後ろに、ドレスを着たレディが縛られていた。
目と口を布で塞がれているが、意識はあるようだ。

バア「！レディ……！
リゼン、何をした！？」

リゼ「しー、レディ様のお部屋では静かに……」

バア「質問に答える！」

リゼ「……ちょっと気絶しているだけだ。
いちいちうるさい奴だな」

(バア)

クソ……

この手錠……トランス機能を使えない作りになってる。

バア「どういっつもりだ？」

リゼ「わからないか？」

私が当主になる為だ」

バア「何だと？」

ここまでしてお前もただで済むわけじゃないだろ」

リゼ「……………」

まあ、アンタは死ぬんだ……

教えてやる」

もう1つのイスに座り、話し始めた。

リゼ「最初はアンタを貴族墮ちにして、追放するのが狙いだった。監視を付けて……

しかし突然逃亡するんだから、消息が掴めなかった。

私が当主になる為には、アナタが必要なんです」

バア「どういう事だ？」

リゼ「私が当主になった暁には、デイグニティ家……
いや……シユレイド家を、グラールの中心にしたいんです」

バア「何を言ってるんだ！？
そんな事出来るわけが……」

リゼ「残念ながら出来るんです。
これからどうなるか……軽く説明しよう。

……
まず、この船は幻視の巫女がいる教団に突っ込みます」

バア「!!」

リゼ「それを起こすのは、アナタ達なんですよ」

バア「お前がやる事だ！」

リゼ「6年前、何の為に監視をつけたと思っただんです？

……
このシチュエーションの為ですよ。

追放された者が追放した者に復讐……
シンプルだが良いシナリオだ。

まあ、アナタを見つけるのに6年かかりましたが……」

バア「……さつき、アナタ達と言っただな……」

フロントム君やルミアちゃんも？

2人はどこだ？」

リゼ「今は下の階で寝てますよ。

……

ガーディアンズがテロを起こすとは、信用を失いますね……
かの亜空間事件を解決したと言うリトルウィング。
グラールには深刻な事ですね。

更に今から特攻するのは、幻視の巫女のいる教団。
これほどの被害を被れば、グラール全土が混沌に包まれる。

……………

それをまとめ上げ、グラールの指導者となるのは……

シュレイド家……

いや……私なんです」

バア「お前は どうする？

このままじゃ“俺”達と一緒に死ぬぞ」

リゼンが微笑する。

紳士服から見える

シールドラインを指差した。

リゼ「このシールドライン……

シールドライン内部に損傷が無ければ、装着者は死亡しないんです」

バア「バカ言うな。

そんな技術……」

リゼ「まだ世には出ていませんが、私が作った物なんです。
ちゃんと試験はしました」

イスから立ち上がるリゼン。

リゼ「唯一の生き残りなんですよ、私は」

そう言いつつ、部屋を出ていった。

く 貴族墮ち 4 (後書き)

5話と長くなってしまいました
が次で貴族墮ちシリーズは終わります。

く 貴族墮ち 5く (前書き)

リゼンのバルルへの態度が定まっていない……

く 貴族墮ち 5く

レディの部屋から出たリゼン。
腕時計を見る。

リゼン「あと30分か……」

……
？ 船が止まってる？」

気づくと、船は止まっていた。

ファ「バルは気づかなかったのか……」

階段のところにファントムが立っていた。

ファ「俺の言葉で思い悩んだのか？」

それだつたら悪い事したな……」

リゼ「バカな……」

アナタに水を進めたのは私なのに……
飲んだところも見た！」

ファ「ああハイハイ。

お前がどこか行ったところで、フォトン武器をスタンモードにして
押し当てていた。

そのせいで横腹が火傷気味だ」

リゼ「チッ」

リゼンはディグニティ家の格闘術の構えをした。

ファ「じゃあ、少し殺り合おうか？」

レディの部屋

縛られているバルはイスごと動き、レディの近くへ進んだ。どうにか口を動かし、レディの目と口を塞いでる布を取った。

レディ「ぷはあ！
お兄ちゃん……」

バア「怪我は？」

レディ「大丈夫だよ」

バア「……」

レディ「何故リゼンを執事にしてる？」

レディは俯いたが、話し始めた。

レディ「私達の家では、当主の次に優秀な人物が執事になるのが通例でしょ……？」

私はその伝統を守った。

……でも、それだけじゃないよ」

バア「何だ？」

レディ「……リゼンは
お兄ちゃんを探してるって……」

バア「探すの意味を間違ってるね……」

レディ「ゴメン……」

バア「謝る必要は無いよ。
とりあえず、どうするかだ……」

ガタン……っつと
天井から音がした。

レディ「何!?!」

天井の扉から、ルミアが降りてきた。

バア「ルミアちゃん!?!」
リゼンは寝ているって……」

ルミ「ファントムさんが起きてて、起こしてくれたんです。
今リゼンと戦闘中です。
そのせいで部屋の前は歩けませんよ」

キーピックを取り出すと、手錠を解除した。

バア「ありがとう」

レディ「ありがとうございます」

ルミ「私はレディさんを守りますので、バアルさんはファントムさんのところへ」

バア「わかった」

バアルは部屋を飛び出した。

2階 階段前

部屋からバアルが出てくる。

バア「ファントム君！」

ファントムは独特な格闘技を使い。
リゼンはディグニティ家の格闘技を使っていた。

ファ「やっと来たな」

リゼ「ルミア様の仕業か……」

バア「僕も戦う」

ファ「何の為に？」

バア「……………」

決まってる……………」

レディの為だ……………」

ファ「……フッ……」

そうか……じゃあここは任せる。

俺は操縦室に行く。

こんな小さい事で、会談を壊すわけにはいかないだろ？」

戦闘を止め、下の階に降りた。

リゼ「待て！」

追いかけてようとしたが、バアルの蹴りを顔に入れられ、階段には行けなかった。

リゼ「上手くいかないものだ……」

バア「悪い事するからだ。」

……
さて、レディの為に戦うのは勿論だが……
ガーディアンズの仕事もしなくてはな」

カノン・クオリアを出し、リゼンに向けた。

リゼ「ファントム様と違って、戦いにフェアが無いんですね」

バア「貴族堕ちなんでね……
そんなものさ」

バンツバンツと容赦無く撃った。
リゼンは避けようとしたが、頭と肩をかすってしまった。

すぐにバアルの懐へ入り、武装解除後に腕を掴んだ。
足をかけようとしたが、わかっていた様にバアルは、タイミングを
合わせて宙返りした。
リゼンの腕が離れる。

すぐに技をかけようとするが、バアルもかけようとして力が拮抗す
る。
腕と足同士が絡んでいる状態だ。

バア「フォトンの弾は避ける様になっただな」

リゼ「わかってて撃ったのですか？
死んだらどうするんです？」

バア「シールドラインで死なないんだろ？」

腕をほどき、腹にパンチをするバル。
よろけたところを足払いした。
6年前と全く同じだ。

リゼ「クッ！」

バルはすぐに、ガードיאアズの手錠を出し、リゼンを拘束した。

バア「お前と同じで……6年間……
何もなかったわけじゃないんだぞ」

リゼ「クソ……」

バア「何故当主になりたがる？」

リゼ「……」

アナタにわかりますか？

……両親ですよ。

大体こんな展開でしょうが！

バア「それにしても真剣過ぎる。」

その理由でグラールの中心になりたいとは思えない……」

リゼ「……グラールの為です」

バア「？」

リゼ「数ヶ月前の……」

“狂神の信念”

あの時の事が頭から離れないんです。

ライエンでも狂人や化け物が出ました……

自分の欲の為に誰かを殺す……化け物もそうだった……

私は人間の本质だと悟った……

しかしそれを抑制する指導者がいれば、あんな事は起こらない。

ガーディアンズも同盟軍も教団もローグスも英雄も……！

今や過去の廃れた指導者。

時代は新たな指導者を求め、抑止力の存在が必要なんです！！

……

その指導者になるのは……私のはずだった……」

バア「……」

船が着陸した様だ。

バア「着いた……」

……さて

お前はガーディアンズ行きだ。

……
俺はヒトとして……

リゼンの思想が間違っていたとは思わない」

リゼ「……………」

バア「やり方が間違っていた。

檻から出たら、違う方法でグラールを引っ張っていくんだ」

リゼンを立たせ、階段を降りた。

バア「あ、レディ達を忘れてた」

もう一度2階へ上がった。

2人の対談は予定通り行われた。

リゼンはすぐに、ガーディアンズのニューデイズ支部に引き渡された。

それでも対談が中止にならなかったのは、幻視の巫女がカレンだったからだろう。

リゼンの事以外は何も起こらず、無事に対談は終わった。

皮肉にも……

この対談は狂神の信念が万が一また起こった時、どう安全に解決するかに対談だった……

数日後……

Gコロニー 居住区

街のベンチにバアルが座っている。
スピーダーシリーズを着ている。

人混みの中から、レディが出てきた。
ジーンズに白いセーターを着ている。

バルを見つけると、走って来た。

レディ「遅れてゴメン！」

バア「待ち合わせの5分前だよ」

レディ「でもお兄ちゃんは早く来てた」

バア「“僕”は10分前行動なんだ。

……じゃあ行くか？」

レディ「うん！」

2人は手を繋いだ。

今日はバルの仕事が早く終わり、レディとデート出来る日なのだ。

対談の後、リゼンのテロ未遂事件は報道された。

勿論批判もあったが、テロに屈しないとの意見もあり、大きな反発

は生まずに済んだ。

しかしレディは、責任があつてかディグニティ家当主の座を退いた。現在のディグニティ家は、別の親戚が当主になっている。

レディはガーデンズにあるバルの部屋に住んでいる。行き場を無くしたからという理由ではなく……レディと真剣に結婚を考えての判断だ。

バア「今日はどこへ行こうか？」

レディ「フフン！」

お兄ちゃんとならどこへでも！」

バア「お兄ちゃんは止めてほしいな……」

2人は街へ消えていった。

- e n d -

く 貴族墮ち 5く (後書き)

ファ「俺達……」

脇役だったな……」

ルミ「当たり前ですよ」

ライ「だな」

～休日 1～（前書き）

ファントムの休日を書いてみました。

しかし

ファントムは休み方を忘れて……？

〜休日 1〜

クラッド6

リトルウイング

居住区

ファントム マイルーム

昔と比べて大きくなったベッドに、赤パジャマを着たファントムが寝ていた。

目が覚めて、起き上がる。

ファ

「……………」

「マリはエミリアの部屋か……………」

昨日からマリは、エミリアの部屋でお泊まり会をしている。
ナギサも一緒だ。

ファ

「ただでさえミカもいるのに、スペース取れるのか？」

黒のフロンティアウイングに着替えた後、何となくカフェに来た。

真ん中の席にワイナルとナギサが座っている。

ファ

「おはよう」

ナギ

「ファントム、おはよう」

ワイ

「おはよう」

挨拶を済ませ、シラッと席に座った。

ファ

「何を話してたんだ？」

ナギ

「うむ、名字の事を覚えているか？」

ファ

「名字……」

ワイ

「ほら、ナギサちゃんの名字の話をしてくださいじゃないか」

記憶の中から掘り出す。

ファ

「あああつたな」

ナギ

「ワイナルの奴……未だに意味を覚えてくれないんだ。
ファントムと同じ名字でも良いのにな？」

ファ

「そんな事もあつたな……」

ワイ

「昔より今の方が教えたくないだろ？」

ファ

「ああ、ややこしくなる」

ナギ

「??? 何なんだ？」

教えてくれ！」

ワイ

「好奇心旺盛なのは良いんだけどね……」

ナギ

「クッ……」

……そうだ！

ファントム、私と勝負しろ！

私が勝ったら意味を教えてください！」

ファ

「え……」

じゃあ俺が勝ったら……

……

いや、止めとこう。

俺が勝つのは明白だ」

ナギ

「何だと！」

ワイ

「やれやれ……」

リトルウィング 格技場

ドーム状の室内で対峙するファントムとナギサ。

上から見ているワイナールがマイクを使って、ルールを説明を始める。

ワイ

「体力はHP制。

初期HPは1500。

先に0になった方が負けだよ。

ラストアタックは使用可、武器の変更もOK。

メイトは使用禁止、アビリティも解除されるよ。

僕の合図で武器を出して、戦闘開始」

ナギ

「わかった」

ファ

「わかった」

.....

.....

……

ワイ

「よーい……スタート！」

ファントムはテインイムソウをトランス。
ナギサはステイルハーツをトランス。

最初に攻撃したのはナギサだった。
しかし避けられる。

ファ

「昔よりは早くなつたな」

ナギ

「修行を積んでいたからな」

ナギサはフォトンアーツ……
グランドクラッシャーを繰り出した。

ファ

「危な！」

側転して避ける。

ナギサとの距離が遠くなった。

見計らったかの様に……

エーデル・フシルで射撃してくる。

しかし、ファントムはフォトンの弾を避けられるので、何発撃っても当たらない。

ナギ

「クッ」

ファ

「行くぞ！」

猛スピードでナギサに近づぐ。

それを認識するのに、近くに來られるまで気づかなかった。

テインムソウを横に振られ、ナギサは上体を反らす。

間髪入れずに
フォトンアーツ……
アブソリュートダンスの一段目の動作に入る。

ナギ

「まずい……」

防御面積が広いスティールハーツを出し、ファントムの攻撃ガードした。

物凄い衝撃がナギサを襲う。

床に倒れて身動きが出来なくなる。

衝撃が収まった頃……

ワイ

「ナギサちゃんの負け。」

ガードしたのにHP全部持っていかれたよ？

訓練で良かったね、本当なら腕が複雑骨折だよ」

ナギ

「う……完敗だ……」

ファ

「そうでもない。」

俺は本気を出していたが、ナギサのフォトンアーツを食らえば一撃だったかもしれない。

……それに、アブソリュートダンスの一撃目は威力が高すぎる」

ナギサを起こし、服に付いた塵をほろつ。

ナギ

「あ…ありがとう」

ファ

「どういたしまして。」

ワイナル、ここの電源を切って良いぞ」

ワイ

「終わりかい？」

もう一回位見たかったけどな……」

ファントムとナギサが格技場から出ると、明かりが消えた。

リトルウィング ロビー

ワイナールは仕事の時間だと言って、ミカと一緒にインヘルト社に出勤しに行った。

ナギサは仕事の依頼が入ったので、別惑星へ行っている。

ファントムは何をしようか考えていた。

ファ

「困ったな……」

バス

「何を困ってるんだ？」

バスクが気になって話しかけてきた。

ファ

「ん？ ああ……
休みの日って何してたかな……」

バス

「休日か？」

「そういえば欠片事件が終わった後のファントムは、休日は出かけていたな」

(ファ)

マリと遠距離恋愛の頃か……

ファ

「亜空間事件の時はどうだった？」

バス

「あの時は……」

俺は分からないな……

エミリアが知ってたりするんじゃないか？

今もそうだが、一緒にいる事が多いだろ？」

ファ

「なるほど……」

「……いや、プライベートな事を知ってるって……」

バス

「？ そういう関係じゃ……」

ファ「ちげーよ。
いや違うはないか……
アドバイスありがとう」

ファントムはエミリアを探しに行った。

リトルウィング 居住区

とりあえずエミリアの部屋に来てみたファントム。

ファ

「エミリアは居るか？」

エミ

「うん、開いてるよ」

扉を開けたが、エミリアが居なかった。

ファ

「あれ？ エミリア？」

すると、ドレッシングルームからエミリアが……
下着姿で、濡れた髪を拭いて出てきた。

ファ

「ちょ！　なんて格好してんだよ！」

エミ

「ゴメンゴメン。」

シャワー浴びてて……

で？　どうしたの？

マリなら仕事に行ったよ」

ファ

「いや、マリに用は無いだ」

エミ

「じゃあアタシに？」

ファ

「ああ……」

俺ってさ……亜空間事件の頃の休日って何してた？」

エミ

「あの時って、休みなんか無かったじゃん。」

アンタ…マガハラ突入前の自由時間だって仕事してたじゃん」

ファ

「チエルシー達と惑星を回った時か……
考えたら休む暇なんか無かったな……」

エミ

「ファントム今日休みだっけ？」

ファ

「ああ、でも休み方を忘れてな……」

エミ

「うーん……」

じゃあ新しい休み方を見つけたら？」

ファ

「新しい休み方ね……」

……とりあえず服着たら？」

エミ

「あ、そうだね」

ベッドに置いてある服を着るエミリア。

エミ

「そうだファントム。

ちょっとアタシに付き合ってよ。

アタシも休みなの」

ファ

「嫌な予感しかしないな……」

エミリアはファントムの手を取り、部屋を飛び出した。

- t o b e c o n t i n u e -

く休日 1く（後書き）

未だに名字の件の、意味がわからないナギサ。

何だが可愛い……

……

うわ……

書いてる自分がキモイ……

く休日 2く (前書き)

短いな……

前の話と同じにして良かったかも……

く休日 27

クラッド6

ショッピングモール

エミリアに連れられ、買い物に付き合わされるファントム。

ファ

「荷物持ちか……」

嫌な予感は的中したな……」

両手にかなりの荷物を持っている。

エミ

「？ 何か言った？」

ファ

「いや…何も」

エミ

「？」

……あ、そろそろお昼だね。
休憩も兼ねて何か食べに行こう?」

エミリアは近くのレストランへ誘った。

レストランの中には、結構お客が居た。
店員に連れられ、席に座る。

エミ

「何食べる?」

ファントムにメニューを見せる。

ファ

「……そうだな……
和風ソースハンバーグにしようかな」

エミ

「じゃあアタシも同じのにしよう。
すみませーん!」

店員を呼んで注文する。
丁度水も運ばれてきた。

ファ

「じっかし、よく買うな……」

エミリアの買った荷物を見て言った。

エミ

「なんか気合い入っちゃって……」

ファ

「気合いって……
何買ったんだ？」

エミ

「えっとね……
服とね…家具と、本、その他もろもろ？」

ファ

「へえ……」

女の子ってそんな感じなのか？」

エミ

「マリと比べた？」

ファ

「君から見ても同じ思っ？」

エミ

「はっきり言って……」

女の子っぽくはないね……」

ファ

「だろ？」

てかお泊まり会って何してるんだ？」

エミ

「それはもう……」

秘密の花園？」

ファ

「いいねえ、青春ってやつだよ……」

エミ

「ファントムだって青春してるじゃん」

ファ

「？」

エミ

「アタシとデートしてる」

ファ

「最初っからそのつもりだったのか？」

エミ

「そっだよ……」

「楽しくない……？」

ファ

「……いや……」

「可愛い子と居れば楽しいに決まってる」

エミ

「なんか、誰にでも言ってる……」

ファ

「女の子に弱いんだ」

っと、

和風ソースハンバーグが運ばれてきた。

店員にお礼を言うと、食べ始めた。

エミ

「女の子に弱いね……」

極例だけども……

女の子が敵だったらどうする？」

ファ

「考えただけでゾツとする」

(ファ)

今朝ナギサと戦ったけど……

その後も、他愛の無いお喋りをしながら食事をした。

リトルウィング

居住区

エミリア自室前

荷物を部屋に置き終わったファントム達。

エミ

「今日はありがと。
何か出来ないかな？」

ファ

「いや、大丈夫だ。
暇つぶしにはなったし」

エミ

「そう？ なら良いんだ。
じゃあね」

ファ

「ああ、また」

ファントムは

リトルウィングのロビーに行った。

リトルウィング ロビー

ファントムがロビーに行くと、マガシが事務所へ行くところを見た。

ファ

「マガシ？ 珍しいな……」

気になって跡をつけてみる。

事務所を覗くと、クラウチに仕事の依頼をしている様だ。

耳を澄ましてみると……

クラ

「ハア？ ルミアの好きな奴？」

マガ

「そうだ、私ではどうもわからなくてな……
調べてくれ」

(ファ)

マジか……

クラウチ、答えるなよ……

クラ

「ルミアとはどういう関係なんだ？」

マガ

「ルミア・ウエーバーとの関係？」

そうだな……

おじさん……？」

クラ

「おじさん……？」

……まあ良い……

ルミアが好きな奴は知ってるぜ。

そこにいるぞ」

顔を出していたファントムを指差す。

(ファ)

言うんじゃない……！！

マガ

「貴様なのか？
なるほど、貴様程の実力なら…大丈夫か…」

ファ

「だよな！　だよな！」

(ファ)

だから戦うなんて言わないでくれー！ー！ー！

マガ

「よし！　今一度、貴様の力を試させる！」

(ファ)

ふざけるな！
こんな戦闘狂と戦えてか！？

マガ

「行くぞ！」

ツーヘッドラグナスを構え、ファントムに斬りかかる。

ファ

「いきなり!?!」

後ろに避ける。
マガシは本気だ……

ウル

「あれって……」

クラ

「ルミアの好きな奴を探してんだとよ」

ウル

「で、戦ってるの?」

クラ

「何なんだろうな?
あんまり物を壊してほしくないな……」

ファ

「待てってマガシ！」

マガ

「問答無用！」

ファントムもヒヤツカリヨウランを出して応戦するが、防戦一方だ。

ファ

「クソ、アンタはお父さんか！？」

大体、ルミアとはそんな関係じゃない！

もっと親密度が無いとだな……」

マガ

「ぶるうあああ！！」

ファ

「話し聞けよ。」

……
ハア、折角の休みが台無しだ……」

マガシの武器を外側に受け流し、腹に蹴りを入れる。
ファントムは武器を捨てるとマガシの頭部を掴み、床に激突させた。

マガ

「ぐわあー!」

ファ

「逃げよ!」

武器を拾い、居住区へ逃げって行った。

マガ

「なるほど……これなら、ルミアを任せられる……」

立ち上がるって武器を仕舞い、停船所へ戻った。

フロントム自室

イスに座ると、ドツと息を吐き出した。

ファ「ハア」……
もう何かする時間も無い……」

冷蔵庫からジュースを取り出し、またイスに座る。

ファ
「考えたら、休みの日なんてヒトそれぞれだな……
行動したそれが休日の過ごし方だよな……
……
チエルシーんとこに飲みに行くか……」

一度伸びると、部屋を出ていった。

- e -
- d -

〽休日 2〽 (後書き)

次回は

リクエストストーリーです。

ホントは最後に書きたかった話なんです、色々考えたら……

「あれ？ 普通に書けんじゃね？」

て思い……

リクエストストーリーです。

内容はヤオロズです。

↳合理的な犠牲 1↳ (前書き)

リクエストストーリーです。

ヤオロズの話なんですけど、
タイトルがアンマッチ。

合理的な犠牲 1

天界

あの真っ白な空間に、テーブルとイス2つがある。
その1つに、マリオネット……
神が座っている。

遠くから大きな獣……

ヤオロズが歩いてくる。

ヤオ

「神よ、妾に用か？」

神

「そうだ、ちょっと時間が無いから簡単に話す。
墮天使君の計画についてだ……」

ヤオ

「戦争の事か？」

神

「まさか、戦争なんて愚の骨頂だよ。事前に阻止するのが、神の資質だよ」

ヤオ

「では何だ？」

神

「すぐに大星霊祭を開いてほしい」

ヤオ

「！？ 何故！？」

神

「墮天使君はすぐには戦争を起こせない。その要因となる人間はグラールに存在する。けど私は、人間に干渉出来ない。だから星霊祭を開いて、彼に話してほしい。だから星霊祭を開いて、彼に話してほしい。近々、戦ってほしい」と

ヤオ

「彼？」

神

「フロントム君だ。

ついでに本気を出してくるといい。

30年に一度じゃないんだ……

“絆の力”は関係無い、強いか弱いからだ」

ヤオ

「……………」

神よ……主は戦いの行方がわかってるのだろうか？」

神

「……………」

ヤオ

「人間に干渉出来ないとっても、未来を見据えてるのではないかな？」

神

「……………その通り。」

どうなるかはわかってる。

これを書いている作者よりも……………」

ヤオ

「作者？」

神

「いや、何でもない。」

堕天使君の計画は、星霊祭が始まる頃には教える。

他の神々にも伝えとく。

……………」

それと……………」

フロントム君が力不足だと感じたら……………」

……………殺せ……………」

グラール
ニューデイズ
大星霊祭会場

大勢の観客がひしめいている。

今回もヤオロズレースがあり、スタート地点にファントムがいた。
今回のメンバーは……

エミリア

シズル

ナギサ

3人はファントムの近くにいた。

ファ

「ハア……」

エミ

「どうしたの？」

ファ

「どうしたじゃねえよ。」

今日は休みだから、寝れると思ったのに……」

シズ

「だが本当なら、次の星霊祭は30年後だったんだぞ？
若い内に貴重な体験はしとくものだ」

ファ

「年寄りか！

若い内に貴重な体験って……

……

(チェリーボーイめ……)「

シズ

「今何か言ったかい？」

ファ

「いやいや！ 何も」

バン、バンバン……

下らない話をしていると、レース開始の花火が上がった。

ナギ

「どっつやら、始まるようだな」

ヒミ

「よっし、頑張るぞー！」

ファ

「来てしまったものはしょうがないな。
優勝は俺達だ」

シズ

「ファントム、さっきの言葉……」

スタートのテープが切られ、ヤオロズレースはスタートした。

ヤオロズレース

コース 中盤

敵をなぎ倒し。

トラップを回避し。

どこで調べたかわからない問題を解き。

もう少しで終盤に着く頃……

同じコース内に……

ファ

「よう、兄貴」

ルシ

「よう」

ルシフェル

マリ

ロスト

リリス

と、遭遇した。

マリはファントムと一緒に良かったが、数合わせの為にルシフェル側に付いた。
若干膨れっ面だ。

ロス

「久しぶりだなファントム」

リリ

「お久しぶりです。」

副隊長「

マリ

「……フン……」

ファ

「マリ……」

ルシ

「ハハハ、ファントム……
大変だな……」

ファ

「他人事だと思いやがって……」

リリ

「隊長、そういえば
ヴィヴィアンさんは？」

ルシ

「どうしたのいきなり？
ヴィヴィアンはヤオロズとの決闘場だ。
てか、ランディール号の奴らは全員あそこだ」

リリ

「そうでしたね」

ルシ

「？」

ファ

「兄貴って鈍いな……」

ルシ

「??？」

ファ

「もう行く……」

……マリ……

マリ

「フン！」

ファ

「うっ……」

……

い、行くっ……」

ファントム達が進み出すと、ルシフェル達も進み出した。

ヤオロズレース

ゴール前

ナギ

「あれがゴールか？」

通路の向こうに、テープが見える。

シズ

「そのようだ。走ろう！」

全員走り出す。

ヒミ

「一番乗りだ〜！」

ゴールテープを切り、1位……
かと思いきや……

隣の通路から、ルシフェル達が出てきた。

皆止まってしまつて。

一同「え？」

一言も喋らない……
観客も黙っている。

その静寂を破つたのは
星霊主長ルツだった。

ルツ

「え〜… 異例ですが、今回は2組が1位という事に……
おめでとうございます。」

1位の2組は
ヤオロズ様と戦う事が出来ます！」

ルツの話に連れられ、観客が歓声を上げる。

フア

「異例にも程があるだろ……」

- t o b e c o n t i n u e -

↳合理的な犠牲 1↳（後書き）

無理矢理ですが、
ヤオロズの人間型を出します。

合理的な犠牲 2 (前書き)

だんだんと新シリーズの概要が……

まだわかりませんが……

合理的な犠牲 2

ニューデイズ

大星霊祭 決闘場

1位の2組は、決闘場の台に上がった。

ロス

「そついえばよ」

「何で1年も経たない内に星霊祭をするんだ？」

ルシ

「さあな……」

「でも、祭り事を嫌いじゃない」

ルツ

「ヤオロズ様が降臨なされます！」

ルツの言った通り、
巨大な神獣 ヤオロズ
が姿を現した。

ヤオ

「来ると思っていたぞ……」

ファントム……

……

ほう、今回は2組か……」

ファ

「それより、何でこんな早くに星霊祭を？」

ヤオ

「さあ始めよう！

決め事は前回と同じ。

そなたらの力……

存分に使え！」

ファ

「聞けよ……」

全員武器を構える。

しかし……

開始1秒で……

ドン！

ファントム以外……

一撃で倒されてしまった。
手を下さず。

言い方を変えると、ファントムだけが倒されなかった。

観客がざわめく。

ファ

「!？」

ヤオ

「邪魔者は消えた」

ヤオロズを睨み付けるファントム。

ファ

「貴様！ どういうつもりだ！」

ヤオ

「悪いが、妾の目的は主だけだ。
妾の本当の力で戦ってもらおう」

ヤオロズが光に包まれていく。

光は小さくなっていき……
人変わらない大きさになった。
光が霧散し……
ヤオロズの姿が見えた。

巫女の姿……
頭のお面……
赤い羽衣……
真っ赤な目……
真っ白な超ロングヘア……

一言で言うと……
絶世の美女だ。
それと……

ファ

「胸……デカ！」

ヤオ

「どづじゃ？ 妾の真の姿は？」

ファ

「悪いがマリには負けるな」

ヤオ

「そのこの男物の服を着ている小娘か？
まさか小娘に負けるとはの……

……

まあ良い」

（ヤオ）

ファントム……

これ以上は主だけとの話だ。

（ファ）

！？ 頭に、ヤオロズの声が……

（ヤオ）

良いかファントム。

神を覚えているか？

（ファ）

覚えてる。

アイツがどうした？

（ヤオ）

妾は神の命令で主と戦いに来た。
詳しい事は話せないが、主が力不足の場合……
殺さなければならぬ。

(ファ)

な!?

(ヤオ)

すまないな、神は絶対なんだ……

ヤオ「行くぞ!」

ヤオロズは腰の鞘から、神剣ヤオロズを抜いた。

ファ

「おい! 話はまだ……」

ファントムでさえもわからなかった……

近づかれて……

既に胸が一文字に斬られていた。

鮮血がヤオロズにかかる。

ファ

「何!？」

目一杯跳躍し、ヤオロズの遠く後ろへ着地する。

ファ

「グツ……」

ヤオ

「どうした!？」

本気でかかってこい！」

ファ

「ふざけやがって……」

ヤオ

「ふざけてなどいない!

死にたくなければ、妾に力を示せ!」

今度は肩を貫かれる。

しかしファントムはヤオロズの腕を掴んだ。

無傷な肩の方にサンゲを持つ。

ファ

「オラァ！」

ヤオロズを斬ろうとするも、もう一方の肩も貫かれる。

ファ

「ぐうう……」

どうにか両方の手を掴む事は出来たが、
肩を貫かれているのに変わりはない。

ファ

「ゲッ……！」

…… オイオイ……

星霊に仕える神獣が物騒だよな？」

ヤオ

「心配するでない。

神から干渉許可は受けている。

周りを見てみるのだ」

ファントムが気を付けながら周りを見る。

ファ

「……何だ？

皆、微動だにしない……」

ヤオ

「そうじゃ。

妾の力で時間を止めている」

ファ

「!?!」

ヤオ

「気にせず戦え」

強引に神剣ヤオロズを引き抜き、2本共同じ方向からファントムを横に両断しようとする。

今度は見える範囲内だった。

サンゲで防御する。

ファ

「!.....クソ.....」

ヤオ

「肩が痛むか？」

まあその状態で今の攻撃を防いだなら、妥協点じゃ」

ファ

「クソ、クソクソ！」

段々と力が無くなっていき、気を抜けばすぐに3枚下ろしだ。

っと、いきなり神剣ヤオロズがサンゲから離れる。

そのままヤオロズは後退する。

ヤオ

「ファントムよ.....」

主.....本気を出しておらんか？」

ファ

「ハア…ハア……」

ヤオ

「妾がこの姿だからか？」

「すまないの、妾はこれと獣の姿しかないのじゃ」

フア

「ハア…ハア……」

何故、力不足で……

……俺を殺す？」

ヤオ

「主らがここに来る少し前……」

「神が他の神に、墮天使ルシフェルの計画を伝えた」

(フア)

墮天使ルシフェル？

……

そういえば……

「神と会った時に、兄貴と同じその名前を言っていたな……」

ヤオ

「その計画には主が必要らしい。」

「もし計画を阻止出来る程の力が無ければ、合理的に排除しなければならぬ。」

「……だが主だけではない」

ファ

「俺だけじゃ…ない？」

ヤオ

「今現在、グラールに住む8人の男女。

そして……

エミリア、シズル、ナギサ……

主を合わせ、12人がその排除対象じゃ」

ファ

「エミリアとシズルとナギサ？

何で3人が……」

ヤオ

「あまり話すと、神に怒られるのでな……

これ以上は別の機会になるじやろう」

剣を構え直すヤオロズ。

ファ

「……………」

今……俺は排除対象か？」

ヤオ

「……………そうじゃが？」

だから主は本気を……

フア

「俺を殺した後……どうする？」

ヤオ

「ふむ……」

主以外は戦力にはならんからの……
神が一度に排除するじゃろう」

それを聞くと、深呼吸した。

フア

「それなら……」

女の子でも本気を出せる……」

ヤオ

「そうかそうか！

やっと本気をだすのか！

妾も最初の本気を出せるというものだ！」

フア

「ああ、存分に使え」

ヤオ

「いや、冗談のつも……」

グサッ

最初のヤオロズと同じ速さだった。

ファントムは瞬時にして、ヤオロズの首捉えていた。

ヤオ

「!!!!!!」

ヤオロズはサンゲを引き抜き、距離を取った。

ヤオ

「ゲホゲホ……」

シヌの様に傷を治し、
ファントムを見た。

ファントムはサンゲとヤシヤを持っている。

(ヤオ)

なんじゃ!?

急に速度が……

………!!

もしや、あの刀……

ヤオ

「その鐔の無い刀……」

ファ

「気付いたか？」

このヤシヤは……

コクイントウの欠片で作られている。

マガハラから少しだけ持ち帰れたんだ」

ヤオ

「そうか……！」

コクイントウは使用者と共鳴し、力を増大させる。

………そして最後に共鳴した時………

主はシヌのウイルスで進化した………

今の速度も納得出来る………」

まさにその通りだった。

ファントムの肩の風穴は、完治している。

ファ

「仲間を傷つけるなら……

誰だろうと容赦しねえ!!」

- t o b e c o n t i n u e -

合理的な犠牲 2 (後書き)

ファントムがチートの塊に……

しかし、新シリーズの敵はチートにはしません。

こんな事書いてますが、まだ新シリーズは始まりません。

合理的な犠牲 3 (前書き)

投稿遅れてすみません……

合理的な犠牲 3

ニューデイズ

大星霊祭 決闘場

距離を置き、相手の出方を伺っていた。

しびれを切らし、ファントムが攻撃を仕掛けた。

ヤオロズの真上から斬り込むが、ギリギリ避けられる。

ヤオ

「なんの！ さっきは油断したが……」

「ほぼ同じ速さなら避けられる！」

反撃に移るも、ファントムはすぐに横へ避ける。

ファ

「互角なら戦う意味は無いだろ！」

ヤオ

「ファントムよ……」

「本気で思っているのか？」

フア

「何だと？」

ヤオ

「その力……」

かなり身体にくるのだろうか？」

フア

「……………」

ヤオ

「凶星じゃろ？」

主がマガハラに居た時は、身体全体がその状態だった。

……………しかし今は表面的じゃ。

常時疲弊していき、傷は治らなくなる。

このまま戦い続ければ、いずれは身体が持たなくなり……………」

フア

「……………死ぬだろうな」

ヤオ

「やはりヒトでは限界があるの……………」

主以外の11人と戦うには、まだ力不足じゃ。

神の命令によって主らは……………」

フア

「そんな事させるか」

ファントムはサンゲヤシャを仕舞う。

ヤオ

「何のマネじゃ？」

頭を下げてても無駄じゃぞ」

ファ

「そんな事はしないぞ……」

ファントムは左腰で居合いの構えをした。

鞘と一緒に刀がトランスされる。

ヤオ

「それもコクイントウの欠片を？」

ファ

「そうだ……」

名を剣影。

新しい戦術の為に作った」

ヤオ

「居合い……」

……しかし制限時間は変わらぬはずじゃ」

ファ

「ああ、変わんねえよ」

ファントムはヤオロズまで移動し、剣影を引き抜いた。

ヤオ

「無駄じゃ！」

神剣ヤオロズでガードする。

アッサリと折られた。

認識する前に、ヤオロズの胴体を斜めに斬られる。

ヤオ

「！！！！」

次の攻撃をかわし、距離を置いた。

血で酷い状態になっているが、豊満な胸が露になり妖艶だ。

ファ

「そのまま両断するのは止めといた。

女の子でそんな死に方は嫌だろ？

……て、神獣は死ぬのか？」

ヤオ

「グッ……」

その刀から……

Aフォトンを感じる……」

ファ

「シヌの力を多く受けた欠片を使っている。

威力は異常だろ？」

(ヤオ)

Aフォトン……

フォトンの中でも特殊……

神々を傷つける力があると神から聞いたがあるの……

……なるほど……

墮天使がシヌを欲するのがわかる。

神はシヌを恐れているのか……？

ファ

「傷は治さないのか？」

ヤオ

「その力があれば問題無い」

ファ

「じゃあ終わ……」

ファントムが動かなくなった。
周りで動いてないヒト達の様……

ヤオ

「……………」

ファントムよ……

忘れてはいないか？

…………… エミリア、シズル、ナギサ……

その3人は敵に回るのかも知れないのだぞ？

……………

それでも仲間を守れるのか？」

？

「今は信じるしかありませんよ」

ヤオロズの後ろに……
ミレイ・ミクナがいた。

ヤオ

「星霊よ……
もう神の力で……」

ミレ

「まだです。
私が生き返るのは6ヶ月後……」

ヤオ

「やはり神は、未来を知っているようだのう……」

ミレ

「唯一絶対完全無欠。
それが神……」

未来位、見据えているはずですよ……
……

それと、私がここに来た理由ですが……
神はここで起こった事を無かった事にするようです

ヤオ

「時間を回帰させると……
ここまで大きな事をすれば当然かのう……
神は最初から？」

ミレ

「わかりません。」

……さあ、時間回帰したら帰りますよ」「

- e n d & a m p ; r e t u r n -

大星霊祭が始まった頃……

天界

イスにマリオネットが座っている。
テーブルをまたいで向かいのイス……
ボサボサ頭で黒ジャージを着た墮天使が座っていた。

墮ル

「何の用ですか？」

神

「またまた」

用位わかつているだろう？」

墮ル

「エホバに似ていますよ、その答えを言わない性格。
僕みたいな墮メ野郎からしたらイライラします」

神

「ごめんね」

……

単刀直入に聞くよ。

君は何しようとしている？」

墮ル

「わかっているのでは？」

神

「さあ何の事やら。」

でも言っちゃうとさ……

神病感染者で私を殺そうとしても無駄だよ?」

堕ル

「……………」

神

「私は存在は全ての次元の神。

つまりもつとも最初の存在……

シヌも仲間にしようとしてるみたいだケド……

Aフォトンには私には通用しない」

堕ル

「なら僕の勝手に良いでしょう?」

神

「神病感染者は人類の…下等種の制裁……

私と戦う……彼、彼女からの条件……

それを見過ごすわけにはいかないんだよねえ……………」

堕ル

「じゃあ僕を消します?」

神

「とんでもない!

引き続き地獄の長でいてほしいから、消しはしない。

それに、君が絶対に悪い事をするとは限らない……

……………」

ただ……

シヌを私に渡せ」

堕ル

「何故？」

神

「久しぶりに……」

罪人を裁いてみたいだけだよ」

堕ル

「……チツ。」

わかりました。

すぐにも引き渡しましょう」

神

「ありがとうございます」

堕ル

「では僕は帰ります」

堕天使が席を立つ。

神

「……」

そういえば……

……

シヌをおかしくした神病……

あれを撒いたのは自分だって言った？
理由は神を消す為だと……」

堕ル

「いえ、それでシヌ君が協力すると思います？」

神

「思えない」

↳合理的な犠牲 3↳（後書き）

てことだ、

星霊祭は無かった事になります。

新シリーズのキーワードを書きます。

・グラールの男女12人。
ファントム、エミリア、シズル、ナギサもその1人。

・神病感染者
神病は、堕天使が神を倒す為に撒いたものです。

・シヌ
Aフォトンも重要。

・ミレイ・ミクナ
現星霊
近い内に生き返ります。

・転生
????

く恋愛概念 1く（前書き）

リクエストストーリーです。

リリースとルシフェルが何やら……？

「恋愛概念」

モトウブ

ある森林地帯

深夜

頭から足まで、緑の迷彩服を着たりリスがいた。
手にはPSG-1を持っている。

しかし明かりの無い夜の為、また伏せた状態なので近づかないとわからない。

リリ

「……………」

息を殺し、スコープを覗く。

(リリ)

サバイバルゲームが始まって何時間も経った……

一向に彼は姿を見せない……
私の隠密技術が上がったのかな……？

考え事で少し油断してしまった。

するとリリスの後頭部に、WA2000の銃口が優しく当たった。

ルシ

「バン！ 俺の勝ちだ。

〇(、()〇」

後ろに居たのはルシフェルだった。

リリ

「うっ……」

どこに隠れていたのですか？」

ルシ

「ずっとリリスの後ろにいた。

(。。()」

リリ

「やっぱり勝てません……
全く気づきませんでした……」

ルシ

「反省会は帰ってからだ。

〃 〃 (・ | ・) 〃

リリ

「……ですね。

……

……まただ……」

リリスは立てなかった。

無理もない、

ずっと伏せていたのだから。

ゲームが長引くと毎回だ……

立ってにいと、

ルシフェルがヒョイっと持ち上げ、お姫様抱っこをした。

リリ

「ちょ！ 隊長！

は……恥ずかしいです！」

ルシ

「問題無いだろ？」

(・・・)

誰も見ていないんだから」

リリ

「そついう事では……！」

……もつ……」

仕方無く、ルシフェルに
身を任せるしかなかった。

(リリ)

……どうしてルシフェルさんは……

こつ……鈍感なんだろう。

2人は山道を進んでいった。

数日後……

ランディール号

ルシフェルが機関室に顔を見せ、タイラーを探した。

ルシ

「タイラー　　（＾０＾）
いるか？」

タイラーは船長席に座っていた。

タイ

「どうしたルシフェル？」

ルシ

「あーちよつと小型船を借りたいんだ。
ヒューガに作ってもらっている武器を受け取りにいくんだ。
（・o・）」

タイ

「ああ、問題ない。

……そうだ、ついでに仕事を頼みたい」

ルシ

「（・・）エツ・・？」

タイ

「ローグスのメンバーで殺人をした奴がいる。

そいつはパルムに逃げ込んだみたいなんだ……

捕まえてガーディアンズに差し出してやってくれ」

ルシ

「了解（、・・）」

タイ

「そのまたついでに、リリースを連れていけ」

ルシ

「リリースを？」

「（・・）？」

タイ

「いいから」

ルシ

「いいからって……

……
まあ仕事で手助けしてくれるか……

「（・・）（、・・）」

そう言い残し、機関室を出ていった。

タイ

「ハア……」

鈍感過ぎるぞ……」

タイラーは頭を抱えた。

GRM社

ローバー

ルシフェルはリリースを連れて、GRM社に到着した。

リリ

「私はここで待っていますね」

ルシ

「すまないm（――）m」

リリ

「いえいえ」

ルシフェルはヒューガの研究室に向かった。

ロビーのイスに座るリリス。

（リリ）

うう……

タイラーさんにルシフェルさんのお出かけを用意してもらったのは良いけど……

仕事モードが消えない……

……

色々なヒトに聞いて、

ヴィヴィアンさんとルシフェルさんは恋人同士じゃないってわかったけど……

……ルシフェルさんが好きな方はいないのかな……？

その後、ずっと考え事をしていた。

一方……

ヒューガの研究室では……

ヒュ

「ルシフェルさん！
待っていましたよ！」

ルシ

「ヒューガが待つのは、女性だけだと思っていたんだが？
”（ノ<>）ノ”

ヒュ

「まあそうですね。
それより、出来ましたよ」

壁に作られた金庫を開け、中のアタッシューケース2つをルシフェルに渡した。

ルシ

「随分と小さいな？」

それに頼んだのはセイバーだぞ。

— (3) —

ヒュ

「GRM社の武器はフォトン系がほとんどですよ。

作ってみたところ製品化出来そうなので、余分に作ってしまったんです。

ツインセイバーで使ってくれば……

開けてみて下さい」

アタツシケースを2つ共開け、フォトン刃を発動させた。

ルシ

「おお (TOT)

良いじゃないか！」

ヒュ

「セイバーの状態が

ルシフェル。

貴方の名前からきています。

ツインセイバーは

セレスティアルブレイズ。

…… フォルムは従来の製品と変わりませんが、性能面はGRM社で

最高。

リーチに特化した刃。

軽い本体。

そして……

使用者の攻撃速度を底上げする」

ルシ

「どのくらいだ？（？）（？）（？）」

ヒュ

「これは比喻なんです……

光速を超えると……」

ルシ

「比喻ってレベルじゃなくね？（・――・#）（）」

ヒュ

「ですよね！

光速なんか超えたら大変ですよね！

……… 実際はその速度になると、形成しているフォトン刃がハッキリと残像を残すので……

比喻として光速なんです」

ルシ

「それでもかなり危ないけどな。

……… 作ってくれてありがとう。

今度飲みに行こう。

（；；）／「

ヒュ

「ええ、待ってますよ」

セレスティアルブレイズをトランス出来る様にし、ナノトランサーに仕舞った。

ヒューガに向けて手を振り、研究室を後にした。

ロビーに戻ると、リリスが足を組んで手を額に当てていた。

ルシフェルが隣に座るが、全く気づかない。

ルシ

「足を組むと骨盤がずれるぞ？」

（´・`・`・`）「」

リリ

「ん？」

あ、ルシフェル……

隊長、ヒューガさんから貰いましたか？」

ルシ

「ああ、なかなかの逸品だ。

あとは試すだけだな。

(。°。 ;ノ)

仕事の対象者でどうにかなるか……？」

リリ

「あ……あの！」

ルシ

「(。・。(。)?」

リリ

「えっと……そのう……」

仕事は後で良いつて、タイラーさんから……」

ルシ

「(。・。(。エツ……?」

そうなの？」

リリ

「はい……」

それで……」

少しだけ自由時間を貰ったんですが……」

……」

私と……その……」

……デートしませんか？」

ルシ
「ああ、良いよ」

即答だった。

く恋愛概念 1く（後書き）

新シリーズのキーワードなんですが……
書き忘れてた事がありました。

・進化

シヌが亜空間能力を手に入れた時です。
ファントムがウイルスと融合したのとは、少し違います。

く恋愛概念 2く(前書き)

- t o b e c o n t i n u e -

付けんの忘れた!

く恋愛概念 2く

パルム

ガーディアンズパルム支部が設立されてある都市。

リリスとルシフェルは手を繋ぎ、ショッピングモール内を歩いていた。

(リリ)

お願いしたら手を繋いでくれた……

もしかして私の事を？

……いやいや、だったら恥ずかしくなくても良いでしょ……

リリスが下を向いて考えていると……

ルシ

「具合悪いのか？」

リリ

「え？ あ！ いや……」

ルシ

「……？」

……そうだ、何か買ってやるよ。

俺はいつも手間かけさせてるからな」

リリ

「！ いえ！

隊長にそんな……」

ルシ

「今はオフだぞ。

デートなんだから、ちょっと甘える位良いんじゃないか？

隊長って呼び方も止めれば良い。

(^O^)」

リリ

「で……でも……

……

ル、ルシフェルさん……」

ルシ

「リリスの方が年上だぞ。

(´・・・´)」

リリ

「……ルシフェル……

その……

……

本を買ってほしい……」

ルシフェルは絵文字を出さずに微笑んだ。

ルシ

「ああ、良いぞ」

ルシフェルに手を引かれ、本屋に向かった。

リリスの欲しかった本を買い、モール内の通りに出た。

ルシ

「恋愛系の本か……」

そういえば、リリスに好きな人はいるのか？

(・o・)ノ」

(リリ)

この人……

ホントに鈍感ね……

リリ

「うん……

いると言えば……いる？」

ルシ

「よくわからないな……

(・ー・;))

……リリスって25だろ？

いてもおかしくないし、

結婚しててもいい年だ」

リリ

「……

貴方が……

結婚相手でも……

ルシ

「何か騒がしくなってるな……(。ー。)」

途中から聞いていなかったのか、周りの状況を言い出した。

(リリ)

真剣に話してるのに……
でも、確かに騒がしい……

客がソワソワしていて、
右奥の広場には人が集まっている。

リリ

「どっしたんだろう?」

ルシ

「さあな……」

とりあえず見に行こうか?

「……」

ヒトが集まっている場所に行ってみる。

どうやら野次馬の様だ。

ガードイアンズが出勤し、バリケードを張っている。

ガーディアンズの中にルウがいた。

ルシ

「何の騒ぎだ？

（ 〇 ）」

ルウ

「ルシフェルさん、お久しぶりです。

先ほどあの銀行に強盗が入り、籠城してるのです。人質が数名いるので、手出し出来ないんです」

ルウが携帯端末を出し、犯人の顔を見せた。

ルシ

「コイツ……」

リリ

「もう“隊長”で良いですね？」

ルシ

「だな……」

ルウ、コイツは俺達が追っている殺人犯だ。俺達で解決する」

ルウ

「前科にローグスのメンバーを殺害してますね。協力という形なら大丈夫ですよ。」

ルシ

「それで良い。」

「タイラーには説明出来る。」

すぐにライフルを取り出した。

リリ

「ちょっと!?!」

「殺しちゃダメですって!」

ルシ

「ガーディアンズに差し出すなら死体でも……」

リリ

「ダメです!」

ルシ

「冗談だって……」

「さて、どうしたものかな?」

ルウ

「人質解放の交渉をしています……
犯人からの返答がありません」

リリ

「打つ手無しですか……」

行き詰まる。

しかし、事態が変わった。

犯人の方から出てきたのだ。

リリ

「!？」

ルウ

「ルシフェルさん、確保して下さい！
人質の安否は私達が」

犯人へ近づき動けなくする。

犯人が喚き始めた。

犯人

「テ、テメーら！

俺みたいな奴に構うんじゃねえ！

アイツ…アイツを止めねえと、金を奪われるぞ！

クソ！ アイツが裏切らなければ金を奪えたのに……

何でだー！！

言うことを聞いてきてやったのに……！！

1人で逃げやが……

ルシ

「黙れ」

腹を殴り気絶させた。

ガーディアンズに引き渡す。

リリ

「仲間が？」

でも逃げたところなんて見てない……」

ルシ

「……………」

中を見てみよう」

人質が無事救出された銀行内は、かなり荒らされていた。

調査しているルウに話しかける。

ルウ

「金庫内の現金、及び貴金属類は全て盗まれています」

リリ

「仲間がいたようですよ？」

「ここ、裏口は？」

ルウ

「ありません。」

逃げるなら正面か、穴でも掘って逃げるしか……
シヨップिंगモール外にもガードイアンズがいますが、それらしき
ヒトは見つからないと……」

ルシ

「……………」

「……リリス、着いてきてくれ」

リリ

「隊長？」

銀行を出て、屋上への階段を登った。

ショッピングモール
屋上

ルシフェル達は屋上へ出ると、高い位置にある看板を見上げた。

男が座っている。

看板の下には大きな袋がある。

リリ

「もしかして……」

座っている男が気づき、ルシフェル達の場所まで降りてきた。

ルシフェルはM19、リボルバーマグナムを構える。

リリスはウインチェスター（ショットガン）を構える。

?

「待っていたら来てくれたね？」

どうやらルシフェル達を待っていたらしい。

ルシ

「テメエ、誰だ？」

こんなチャライ奴と知り合った覚えは無い」

見た目はかなりファンキーなイメージだ。

髪型はトゲトゲに固めてある。

服装はアクセサリーでジャラジャラしている。

カザ

「僕ちんの名前は

カザリ・イリオン

ていうーか……

名前を聞く時は自分からっしょ？」

リリ

「隊長、殺して良いですか？」

ルシ

「イライラするのはわかる。
でも抑える」

カザ

「すまそ、“今も昔も”こつこつ喋り方なんすよ。
しかし……」

ルシフェルさん……

アンタがファントムの兄ちゃんか……」

ルシ

「ファントムを知っているのか？」

カザ

「今の彼は知りません。
昔の彼は知っています」

リリ

「どつこつ意味ですか？」

カザ

「ねえちゃんは黙っててくれる？」

リリ

「ハア！？

何で貴方なんか……！！……

ルシ

「落ち着け。

簡単に言っと、盗んだ物を返してくれれば……
痛い目に合わさずに済むぞ？」

ファントムの知り合いでも構わない」

カザ

「ルシフェルさん。

ここに居るのをわかったなら……

僕ちゃんが普通じゃない事わかるっしょ？

盗んだ物も返さないし、痛い目に合うのはアンタと僕ちゃん五分五分
つす。

ファントムとの関係は話す必要も無いっす」

ルシ

「……………」

なら……

力で殺り合おうか？」

すると、

ルシフェルからわかる様に殺気を放ち始めた……

リリ

「（ゾッ……）」

カザ

「うっ……」

（流石、墮天使と同じ名を持つだけある……）

すみませんが分が悪いようっす。

トングズラこきまゝす！」

盗んだ物まで跳躍した。

ルシ

「チッ！ 待て！」

M19を全弾撃った。

カザリが腕をかざすと、弾がカザリの目の前で跳ね返って落ちた。

ルシ

「な！？」

リリ

「何をしたの！？」

カザ

「では……」

新シリーズで会いましょう。
バイバイ！」

そう言い残すと、瞬間移動したように消えた。

同時にルウが屋上に来た。

ルウ

「さっきの銃声は？」

リリ

「ルウさん……」

犯人を見つけたのですが……

取り逃がしてしまっ……」

ルウ

「そうですか……」

……今回のご協力ありがとうございます。

監視カメラに映ってると思います……」

ルウは階段を下っていった。

ルシ

「さて！（。。。）

デートの続きをするか！」

ピリピリしていた状況が無くなり、顔文字を使い始めた。

リリ

「凄い変わり様ですね……」

ルシ

「敬語——（3）——」

リリ

「あ…ゴメン……」

ルシ

「今度から……」

仕事でも敬語は止めてくれ。

m(——)m

リリ

「え？」

ルシ

「深い意味は無い。

ただ何となく……」

……ダメか？

（。。。）

リリ

「……………」

……いえ……

喜んで」

その後……

タイラーに事の末路を告げた。

一応カザリ・イリオンの事を話した。

その日を境にルシフェルとリリスはよく出かける様になった。

リリ

「ルシフェルって……」

……好きな人いる？」

ルシ

「どうだろうな……」

俺は、恋愛の概念が無いんだ……

これまでバカみたいに戦った……

だから恋愛ってのはイメージが無い。

ファントムと違ってな。

(´・`・´)

リリ

「……………」

わかった。

じゃあ私が……………」

恋愛を教えてあげるわ!」

ルシ

「WWW、頼もしいな。

（　　）

ランディール号

ルシフェル自室 副艦長室

通信に残された留守電

ルウ

「……………」

もしもしルシフェルさん?

あの一件で共犯の
カザリ・イリオンについてですが……
彼はパルムに住む学生だったそうです。
プロフィールを送ります。

……
……事件が起こる10日程前から行方不明だったのですが、監視力
メラに映った映像をご家族見てもらったところ……
本人に間違いないと……
現在全惑星に指名手配中です。
逮捕後に連絡します。

……
……それと……

これは他言無用ですが……
銀行に残っていた犯人……独房で死亡していました……
壁で潰されようでした。
損傷が激しいので死因はわかりませんが……
……他殺かと……

……
……キャストの私が言うのは変ですが……
この先嫌な予感がします。
くれぐれも気を付けて下さい。
では、また……」

〈恋愛概念 2〉（後書き）

カザリ・イリオン

性別・男性

年齢・18歳

種族・ヒューマン

身長・175cm

体重・61kg

所属・？

ショッピングモールで銀行強盗を起こした謎の男性。
共犯のローグスを裏切り、銀行内の物を盗む。

典型的なチャラ男。

ファントムとルシフェルを知っている。

“昔と今”の意味とは？

〈好感度上昇企画 1〉（前書き）

リクエストストーリーです。

ウルスラさんとチェルシーの雑談みたい。
みたいじゃなくて
ほぼ雑談です。

好感度上昇企画 1

クラッド6

リトルウィング

事務所

事務所の一角にエミリア、ナギサ、ウルスラ、チエルシーが集まり

……

何やら話している様だ。

チエ

「フーン……」

「ジャア…ファントムはハッキリシテナイノ？」

エミ

「そうなの！」

「……別に今の週間は嫌いじゃないけどさ……」

ウル

「特別な感情無く抱かれても、***は楽しくはならないものよね
……」

ナギ

「最低でも私達が好きだから良い……
でも…彼が愛しているのはあくまでもマリだからな……」

エミ

「ファントム自身は***をがんばってくれてるけど……」

チエ

「彼カラも愛シテホシイノネ？」

ウル

「なら簡単ね！」

ファントムを振り向かせれば良いのよ」

エミリアとナギサの顔が沈む。

エミ

「いや……」

アピールしてるんだけど……」

ナギ

「何とも思っていない……」

ウル

「どんな風にアピールを？」

エミ

「***とか……」

ナギ

「*****だな……」

ウル

「方向性がおかしいわ……
たぶん、マリ思考ね……」

チエ

「エミリア、ナギサ……
フロントムがソノ行為でドキドキスルのはマリダケヨ。
モット心の方カラジャナイト」

エミ「心の方？」

ナギ「心の方？」

ウル

「つまり……」

マリと同等に見られないといけないの」

エミリアとナギサには

高いハードルだった……

やってみましよう!」

数日後……

出来るだけ知り合いの休日を含ませ、リゾート地区で遊ぶ事になった。

人数が多いのは不思議がられない為。主目的はエミリア、ナギサ、ルミアがファントムに好かれる事だ。
一応意識はしている。

マリに話してみたら……

マリ

「面白そう!」

それにエミリア達とファントムを仲良くさせるのは約束だったからね!」

スケジュールは

遊園地〜海〜ホテル

しかしリゾート地区で遊ぶにも、お金が必要……

ファントムに相談したところ……

ファ

「ハア!？」

休日にもリゾート地区!？」

しかも俺の金で工面してほしい!？」

どんだけ金使うんだよ!？」

人数も多いし、前と違って遊園地やホテルまで……

……

え……？

マリ達に夜の休みを取り合う？

……

……

ま……まあ、良いだろ。

たまには、俺から何かするのも……良いかも……

……それが理由だ!

毎晩疲れるからじゃない!

……で? どの位かかるんだ?

……

一、十、百、千、万、十万、百万、一千……

チエ
「アイサー！」

数日後……

リゾート地区でファントム達の慰安旅行が始まった。

肝試しの話に似ているのは気のせい。

- t o b e c o n t i n u e -

好感度上昇企画 1 (後書き)

ファントムの貯金って……
どの位なんだろ？

好感度上昇企画 2 (前書き)

書いて気づきました。

この話難しい……

生まれてこの方、

彼女を作った事無いから？

モテないって悲しい……

〈好感度上昇企画 2〉

慰安旅行当日

旅行ではないが……

リゾート地区 遊園地

企画に集まったのは……

- ・ファントム
- ・エミリア
- ・ナギサ
- ・ルミア
- ・マリ
- ・シズル
- ・ユート
- ・イーサン
- ・カレン
- ・バアル
- ・レディ
- ・ルシフェル
- ・リリス
- ・ロスト

皆私服である。

珍しいのはファントムがフロンティアウイングを着てる事。
ルミアはピザハットグラーウル店制服を着てる事。

(私服じゃなくコスプレ？ 帽子が無いだけマシだが)
イーサンとカレンはユニバーズ時代の服だ。

ちなみに、ウルスラとチェルシーは1日全ては休めないの、モニ
ターしながら見守る。

ファ

「俺合わせて14人……」

まあ、これ以上多くなるよりマシか……
じゃあ各自昼まで遊べ。

昼になったら入口まで集合な、解散！」

イー

「修学旅行みたいだな！」

ファ

「修学旅行と違って遊ぶだけだ、けど時間は守ってくれよ。
返事！」

「はい」

ユート、シズル、ロストが最初に動いた。

テンションの高いユートを、シズルとロストが止めないといけない。

バアルとレディは相変わらずのラブラブだ。

イーサンとカレンは久しぶりに休めたらしい。

今日のカレンは積極的のようだ。

ルシフェルとリリスは手を繋いで行ってしまった。

ファントムは

“いつの間にか？”
と思った。

最後にファントムと

エミリア、ナギサ、ルミア、マリが残った。

出来るだけ自然な感じにするため、ウルスラとチェルシーの協力者はマリだけだ。

(ウル)

「じゃあマリ。

上手く3人をファントムに近づけてね」

(マリ)

「了解」

マリがファントムに近づく。

ファ

「ん？ どうした？」

俺は遠くへは行けないから一緒に無理だぞ？

何で企画責任者になったかな……」

マリ

「変わってあげるよ」

ファ

「いや、君が楽しんで……グホ！」

ファントムにボディーパーカーをお見舞いし、耳打ちした。

マリ

「ファントムはアタシ以外の事も考えて」

ファ

「ハア？」

マリ

「ほら、女の子を待たせない」

ファントムの背中を叩き、エミリア達のとこへ……

マリの行動がわからないファントム。
勿論、エミリア達もだが。

ルミ

「あれ？ マリさんが入口で待つんですか？」

ファ

「みたいだ」

ナギ

「今…マ리에殴られなかったか？」

ファ

「ああ、腹にな……」

エミ

「ん……」

まあ折角変わってもらったんだし、楽しもう？」

ちょっと悲しい顔をした
ファントムだったが、顔を戻し、マ리에手を振って背中を向けた。

その隙にマリがエミリア達に“ガンバ!”のポーズをとった。

4人を見送ると……

(ウル)

「強烈なパンチだったわね……」

(チエ)

「モウチヨット違う方法は無カッタの？」

(マリ)

「結果ですよ、結果。」

ファントムの服に盗聴機を付けましたから、あとは頼みますね。
アタシ入口に居なきゃいけないんで」

(チエ)

「イツカ2人デ？」

(マリ)

「当然」

遊園地 道路

先ほどのマリの行動をファントムは考えていた。

(ファ)

女の子を待たせない……？

そして俺の代わりに入口に残った……

私以外も考えてって言ってたな……

……

まさか、この企画……

元々は俺とエミリア達を仲良くさせる為……？

だとしたら、デカイ事するな……

ファントムの考えは半分当たっていた。

この企画に裏がある事。

もう半分は……

この企画はファントムに優しくされる事ではなく、ファントムがエミリア達を好きになるという事だ。

(チエ)

「ファントム黙ッチャッテルヨ」

(ウル)

「彼が動かなくてもエミリア達が率先するわ。
今回、マリは居ないんだから」

エミ

「おい！ ファントム」

「これ乗ろうよ！」

(チエ)

「アラ、ホント」

エミリアが指差したのは定番中の定番
ジェットコースターだった。

ナギ

「これは…何だ？」

(ウル)

「そういえば、ナギサは遊園地に来た事無いんじゃないかしら？」

ルミ

「ジェットコースターです。」

乗り物に乗って、物凄いスピードで動くんです」

ナギ

「？ 何の意味が？」

ファ

「スピード感を楽しんだよ。」

早く並ぼう」

列に並び、順番が来るのを待った。

ファントムが前になり、3人は後ろについた。

ファントムが前を向いてるのを見計らい、3人がコソコソ話を始めた。

エミ

「良い？ マリのあのポーズは、アタシ達がファントムと親しくなれって意味よ」

ルミ

「え？ そうなんですか？」

ナギ

「恐らくはウルスラとチェルシーが回したのだろう」

(チエ)

「アゝア……」

バレチャッタ。

ドウスル？ ウル？」

(ウル)

「自然体にするつもりだったけど……」

……仕方無い、彼女らのアタックに期待しましょう」

ルミ

「話がわからないんだけど……」

エミ

「ちょっと前にウル……お母さんとチェルシーにファントムの事で相談したの」

(ウル)

「お母さん……」

あまり言われないけど……良いわね」

ルミ

「何をです？」

ナギ

「***」

ルミ

「ええ！？」

思わず大きな声を出す。

ファ

「！ どうした？」

声にビツクリし、振り返る。

ルミ

「いいい、いえ！

何でもありません！」

ファ
「？　そうか……」

また前を向く。

エミ

「ちよつと違うね、ナギサ。
アタシ達が相談したのは、ファントムの接し方。
ファントムから好かれる為……
ルミアにもメリットがあるでしょ？」

ルミ

「そうですけど……」

ナギ

「そつなのか？」

エミ

「聞いてないっけ？
ルミアもファントムの事好きなんだよ？」

ナギサの顔が険しくなる。

ルミ

「ちょ、エミリア！

ナギサさん、ちが……

……

……

いえ、やっぱり訂正しません。

今回は私、攻めます」

(チエ)

「アラアラ」

女の戦いネ」

ナギ

「良いだろう……」

その代わりに、私も全力で行こう」

エミ

「ア……アタシだって！」

3人は火花を散らした。

(ウル)

「何やってるの……」

「3人全員が好かれなさい！」

(チエ)

「最初の趣旨カラスレテルワネ」

「デモ、コノ競争が良イ方向にナルと思ウネ」

(ウル)

「？」

- t o b e c o n t i n u e -

く好感度上昇企画 2く（後書き）

ルミアどうしようかな

このままファントムと“しない”か、
エミリアやナギサと一緒にするか……

はい、ゲス野郎ですみません。

好感度上昇企画 3 (前書き)

また更新遅れてすみません。

好感度上昇企画 3

クラッド6

リゾート地区

遊園地

ジェットコースター前

ファントムがベンチにへたり込んでいる。

ルミアは問題無いみたいだ。

ナギサは気分が悪くなり、近くのトイレで“戻してる”ようだ。
エミリアは付き添っている。

(チエ)

「ルミア、チャンス！」

ファ

「ダメだ…酔っちまってる……」

ルミ

「意外ですね……」

ファントムさんなら大丈夫だと思ったんですが」

ファ

「俺だつてヒトだ。
苦手な物位ある……」

ルミ

「幽霊とか？」

ファ

「……ハアアア?!
な、なわけないだろ！」

俺がゆゆ、幽霊が苦手つて…子供じゃねえんだよ!」

かなり同様している。

ウルスラとチエルシーにバレただろう。
現に笑つてモニターしている。

ルミ

「フフフ、じゃあそうしときます」

ルミアが微笑んだ……

何気無い笑み……

しかし、その場にいたヒト達のほとんどが見てしまつほど魅力的だ
つた。

それにファントムは……

ファ

「そうしとく、じゃなくて！
元々苦手じゃないんだ！」

(チエ)

「アレ？ 効果無シ？」

ルミアに何の魅力も感じなかったのか、平然としていた。

ファントムを落とすつもりだったが、ルミアの笑顔はアッサリ失敗した。

(ルミ)

いつかの為に練習した笑顔が……

少し涙目になるルミア。

ファ「!?!? どうした……? ?
な、何か気に触ったか?」

(ファ)

……!
……
もしかしてさっきの笑顔……

……
何やってんだ俺……

(ウル)

「私の知っている中で、ファントムの初めての失敗じゃないかしら
?」

389

ルミ

「……いえ、何でもありません……」

ベンチから立ち上がり、どこかへ行くこうとする。

ファ

「! 待ってくれ!」

手を掴んだ。

ルミアが振り向く……

その振り向いた顔は

全く自然体の泣き顔だった。

(ファ)

(ドキッ)

カ、カワイイ……

ルミ

「ちょっと、1人に……」

ファ

「行くな」

ルミ

「え？」

ファ

「……さっきは悪い。」

俺を振り向かせようとしてるのに、すぐに気づかないで……」

ルミ

「ファントムさん……」

「……!……」

腕を引き、ルミアを抱き寄せる。

突然なので慌てる……

しかし慣れてきて、腕を背中に回し、ファントムの胸に納まった。

ルミ

「……」

ファ

「仲間を守るのが信念のくせに呆れるよな……
傷付けるなんて……」

ルミ

「……私は仲間なんですか?」

背伸びして顔を近づけた。

(ファ)

ルミア……

……

……

マリ、すまない……

そもそも君が仕掛けた事、浮気じゃないはずだ。

ファントムもルミアの頬に手をあて、顔を近づける。
人目を気にせず……

エミ

「何やってんのよー！」

エミリアが走って来てファントムに腕を回し、スープレックスを食らわした。

ファ

「どわ！」

倒れたファントムに、ナギサが四の字固めが決まる。

ファ

「ちよま…！ ギブギブ！
痛たたたたたた！
タップしてるだろ…！」

エミリアはナギサに
もっとやれ

のポーズをとり、ルミアに話しかけた。

エミ

「危ない危ない……
そう簡単にはいかないわよ」

ルミ

「あと少しだったのに……
……でも良いわ。
彼はもう振り向いてくれたと思う」

エミ

「クッ……」

ファ

「何の話してんだよ！？
てかナギサ！ 離せ！」

少しすると離れたが、暫くの間3人に引つ張り凧だった。

(ウル)

「何はともあれ……」

ルミアが最初だったわね……
でも、3人が競い合って良い結果になるとは思えないわ……
いや…別にチエルシーを疑ってるわけではないわよ……？」

(チエ)

「大丈夫ヨ、大丈夫。」

競争で美シクナル女の子もいるわ。

コノ3人がソウヨ」

チエルシーは画面を見た。

そこには遊園地で遊ぶ

ファントム達の姿が映っていた。

遊園地 海

マリ

「モテ男は大変ですな
もう気付いたでしょ？」

この企画は、エミリア達とファントムをくっつけるのが裏目的だっ
て」

海岸へ向かう道路で、ファントムに話しかけるマリ。

ファ

「腹立つ言い方だな……」

良いのか？

俺が君以外の子を好きになっても？」

マリ

「アタシにはわかる」

ファ

「何が？」

マリ

「ファントムはアタシから離れられない。

何故なら、アタシはファントムから離れられないから」

ファ

「ストーカーぽいな……」

でも過言じゃない」

海水浴場に着いた面々。

前回と違い、他の客が結構来ている。

ファントムは更衣室の場所を教え、自分も男子更衣室へ向かった。

(ウル)

「更衣室はさすがに無理ね……」

(チエ)

「私は大丈夫ヨ？」

(ウル)

「ダメ」

男子更衣室内

リゾート地区とあって広く、綺麗で設備が整っている。
個室も多い。

ファントムは赤い海パンを履いた。

ファ

「うわぁ……」

またそれかよ……」

別に否定したわけじゃないがな」

ファントムはシズルの水着を見て言った。

シズ

「心では否定しただろう？
これが僕のスタイルだ」

ファ

「ハイハイ。」

……そういえば、兄貴とロストとは初めてだな……」

ルシフェルは普通のズボンの様な、黒い水着だ。
ロストは深緑色のウェットスーツだ。

ファ

「サーフィンでもするのか？」

ロス

「そうだけ。」

結構得意なんだ。

……そうだ、ファントムに話しときたい事があるんだ」
ファ

「最近目立たないな」

「って話は聞きたくないが？」

ロス

「そんなんじゃないよ。」

実は……

……
？ ユートとイーサンは？」

話し始めようとしたが、ユートとイーサンが居ない事に気づくロス
ト。

シズ

「さっきまで居たんだが……」

ルシ

「もう出ていったぞ。」

一応バアルが追いかけて行ったけど。」

（・o・）ノ

ファ

「バアルが追いつかなかつたら、色んな意味で危険だぞ……
アイツら子供だからな」

更衣室を出て探しに行った。

一方、女子更衣室

マリとリリスとレディ以外は着替え終わり、室内で待っていた。既に雑談が始まっている。

ルミ

「エミリア……」

「また大きくなった？」

最近成長長期気味なエミリア。
ルミアは全く……

ルミ

「カレンさんもナギサも大きいし……
何で私だけ……」

レディ

「じゃあアタシが大きくしてやる〜！」

さっきまで着替えていたレディが、ルミアの小さな胸を揉み始めた。

ルミア

「ちょっと！ レディさん……」

あ……ハア……ん……」

レディ

「ほれほれ」

デイグニティ家の雰囲気が消えたせいかな……
かなりハイテンションだ。

カレ

「まあ……」

まだ見込みはある」

カレンはピンクのビキニを着ている。

エミ

「カレンさんみたいな水着を着たら？
胸が強調されるかもよ？」

レディの手を離す。

ほんの少し息が荒い。

ルミ

「それに追いつかないほど小さいわ……
ナギサさんって、いつから胸が大きくなり始めたんですか？」

ナギ

「私か？」

……そうだな……

……

……

「すまない、覚えてないな」

エミ

「普通に覚えてないのね……」

胸の話が終わりそうになると、何故か1つの個室から、マリとリリスが出てきた。

リリスは黒いビキニなのだが……

下の水着の後ろに、大きなリボンが付いている。

リリ

「マリ〜……」

恥ずかしいってこれ……」

マリ

「こんなの若い内しか出来ないんだから……楽しまないとしても泳ぎにくそう……」

一方マリは……

赤の水着上下共に露出度が高く、胸の谷間は下から上まで見えていて、脚線もほとんど見えている。

エミ

「な……何て格好してるの!？」

マリ

「皆「じつじつ」の着たく……」

「ない!」

-
t
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
-

く好感度上昇企画 3く（後書き）

この話……

長くなりそうだ……

出来るだけ早く書きます。

好感度上昇企画 4 (前書き)

エミリア達は、争っている時以外は仲良しなんです。

好感度上昇企画 4

クラッド6

リゾート地区 海水浴場

ユート達を手分けして探してみると、意外に普通に遊んでいた。

ファントムは

“この後の展開って……”

無垢なユートが女性更衣室に入る、だよな……”

なんて下らない事を考えながら、日光浴をしていた。

ファントム達は知らないが、ウルスラ達のモニターが再開された。

407

(ウル)

「やっと再開ね……」

何か、遊園地の時より競争の雰囲気が無いんだけど……」

当のエミリア達は、仲良く海で遊んでいる。

ファ

「楽しそうな事で……」

辺りを観察していると、サーフィンをしていたロストが近づいてきた。

ロス

「危ない危ない……」

話したい事があるんだった……」

ファントムの横であぐらをかく。

(ウル)

「これじゃあ平行線ね……」

(チエ)

「ジャア、他のを見ル？」

チエルシーはマりに連絡し、バアルとルシフェルに盗聴器を仕掛けさせた。

仕掛け終わると、モニターにバアルとレディを映した。

(ウル)

「ファントムの報告書に書いていたヒト達ね……」

(チエ)

「コノ2人が兄妹ってホントカシラ？」

2人は砂浜を手を繋いで、のんびり歩いていた。
バルは青い水着を履き、レディはピンクの水着を着ている。

レディ

「こんなの初めてだね」

ファントムさまさまだね？」

バア

「ハハハ、言えてる」

レディ

「……アタシね、本当に良かった……」

バア

「何が？」

レディは答える前に、バアルに付いている盗聴器を取った。

(ウル) 「あ！」

(チエ) 「ア！」

バアルは付けられたのに気づかなかつたらしい。

バア

「？ 誰が仕掛けたんだ？」

盗聴器を潰すと、先ほどの話の続きをし始める。

レディ

「本当に良かった……」

「お兄ちゃんと出会えて……」

バア

「兄妹なんだから、出会えるのは当然だろ？」

レディ

「そうじゃないよ」

「……だからね、また会えて良かったってこと」

バア

「……」

ああ………そうだね………」

(チエ)

「才見通シってワケネ………」

(ウル)

「ただ者じゃないわね………」

「……しょうがないから、ファントムのお兄さん達に映りましょう」

ルシフェルとリリスは、海に入ってじゃれあっていた。

リリ

「くっええ！」

海水をかけられ、後ろに倒れるルシフェル。

ルシ

「なんの！()。()。()」

倒れ際に足で水をかける。

レディ

「キャ…！」

ルシ

「wwww、()。()」

随分と楽しそつだ。

(ウル)

「若いわね……」

(チエ)

「ジャア、シャツチヨさんと……」

(ウル)

「ないわね」

一方、ファントムは……

ファ

「……………」

ハッキリ言つと信じられないが……

……アンタが嘘を言うわけないしな……

わかつた、覚えとく」

ロス

「さすが仲間思いだな。

俺はもう一回楽しんでくるよ」

そう言い残すと、サーフィンをしに駆けていった。

ファ

「……………」

(チエ)

「ン？」

ファントム達、話し終ワツタミタイネ」

(ウル)

「じゃあ戻しましょう。

次は誰が動くのかしら？」

少しするとナギサが海から上がり、ファントムの横に座った。

ナギ

「貴方は遊ばないのか？」

ファ

「俺は良いよ。」

そもそも俺が企画に金を出したのは、君達への恩返しも含まれるからな。

(本当は夜の安眠の為だけど……)「

(チエ)

「ボソツと言ッタネ」

ファントムは小さく本音を言った。

ナギ

「? 何て？」

ファ

「いや、何でもない。」

まあ…遊び慣れてないって事さ」

ナギ

「私よりもか？」

ファ

「どうだろうな……」

お互い戦いを生業としてきたんだ……
知らない事もあるし、やらなかった事もある」

ナギ

「ふむ……」

では一緒に学んでいこう」

ファ

「……ああ、そうだな……」

(ウル)

「さっき何を話していたのかしら？」

考え事してるかのように、返事に力が無い。
先ほどのロストの話が頭から離れないようだ。

それを具合が悪いと捉えたナギサは、ファントムの手を取った。

ナギ

「大丈夫か？ ファントム？」

(ファ)
何だ……？ 何か触られると恥ずかしいな……

ファ

「あ、ああ……
大丈夫だぞ……
何でだ？」

ナギ

「……心配なんだ……
元気が無いように感じたぞ……？」

ファントムの目をまっすぐに見て、手を強く握った。

(ファ)

(ドキッ)

うっ……まただ……
ルミアに引き続き、ナギサまで……

ファ

「だ……大丈夫、だ……」

……その、もう少し俺に寄ってくれないか？」

ナギ

「こっか？」

体をファントムに寄せ、腕に絡む。
完全に胸が当たっている。

ファ

「もうちょっと離れても良いけど……」

ありがとう……」

考え事が飛ぶよ……」

ファントムもナギサもそのままだった。
どちらもその状態でいたいのだ。

(ウル)

「青春って素晴らしいわ……」

(チエ)

「私達そんな年じゃないものね……」

ウルスラとチエルシーはため息をついた。

海 ホテル

更衣室で着替えてホテルに向かう。
既に夕日が灯っていた。

終始ユートのテンションが高いのだが……

ユ

「楽しかったなー
なあ、これからどこ行くんだ？」

フア

「今日泊まるホテルへ行くんだ。
ぐっすり寝れるだろうな」

(ウル)

「あとはエミリアだけね」

(チエ)

「自分の娘ダケアツテ、見方が違ウ？」

(ウル)

「そんな事はないわ。

……て言ったら嘘になる……」

ファントム達はホテルに着いた。

洋風、和風、どちらも対応しているホテルで、大浴場にカジノ、シヨッピングモールまである。

ファントムはホテルの係員に、予約した部屋を確認させた。

鍵を貰って戻る。

ファ

「じゃあ渡すぞ。

・イーサンとカレンで
1部屋。

・バアルとレディで

1部屋。

・兄貴とリリスで
1部屋。

・ユート、シズル、ロストで1部屋。

・エミリア、ナギサ、ルミアで1部屋。

・俺とマリで1部屋。

文句は一切無し、以上」

エミ「待った！」

ナギ「待て！」

ルミ「待って下さい！」

リリ「待って！」

早速文句。

ファ

「何だよ？」

エミ

「マリだけファントムの部屋はおかしいわ！」

ナギ

「同意見だ。」

「ここは5人で1部屋だ」

ルミ

「そうですよ！」

（いや、5人は変かな……）」

リリ

「副隊長、5年前と同じで私を1人部屋に！」

1人だけ文句がおかしい。

ファントムは親指を立てた。

5年前ルシフェル達が行なった事と同じだ。

リリ

「な……！」

ファ

「受け流す。」

エミリア、ナギサ、ルミア……

……ダメ！

……

「と言っても、断るよな……」

仕方無く、同じ部屋にする事にした。

納得したので、部屋に向かう事になった。

ルシ

「わかってるぞ。」

(^ ^) - ムムム……」

ルシフェルにキスされる。

リリ

「……！」

ルシ

「いつまでも見て見ぬ振りはダメだからな」

リリ

「いい、いつ……いつから!？」

ルシ

「昨日気付いた」

(リリ)

やっぱり鈍感だ……

ルシ

「たまには積極的で良いだろ？」

(^ ^) - Chu!!」

リリ

「!!!」

またキスされ、

リリスは放心状態になってしまった。

- t o b e c o n t i n u e -

く好感度上昇企画 4く（後書き）

ロストの話とは？

ロストって目立たせれないな………

く好感度上昇企画 5く(前書き)

好感度上昇企画 4のルシフェルの

(^ ^) - C h u ! !

は、1度目が頬、2度目が唇です。

でもキャラのイメージは人によって様々なので、ご想像に任せます。

好感度上昇企画 5

(チエ)

「ウン……」

ホテルの中は無理ミタイネ」

(ウル)

「そう……」

しょうがないわね。

マリが帰ってきたら教えてもらいましょう」

クラッド6

リゾート地区 ホテル

ホテルで使う荷物は、部屋に届けられている。
全員部屋に着き、くつろいでいる頃……

イーサンとカレンの部屋
洋室

イー

「うわ！　すげえな！
見てみるよカレン」

部屋の窓からの光景に驚くイーサン。
カレンも見ると誘う。

カレ

「ああ、本当だな」

暗くなった外……
しかし月と星が夜空を彩り、海に姿を映す……
まさに幻想的だ。

イー

「良かったな。
ここに連れて……」

カレ

「そうだな……」

私達は仕事が多いから、旅行も行けないしな」

2人は肩を寄せ、景色を堪能した。

ファントム達の部屋
和室

大きめな部屋に変えてもらったが、5人も居れば狭い感じがする。

ファ

「フウ……」

1日の疲労が一気に登ってきたのか、ため息をついた。

近くにあつた湯飲みにポットでお茶を入れ、ゆっくり飲み干した。

一方エミリア達は、窓際に集まってトランプをしている。
ファントムはパスしているのだ。

(ファ)

ロストのあの話……

一度皆に相談を……

いや、信じるとは思えないな……

誰が信じるだろうか……？

“星霊祭が行われたが、無かつた事になつた”

など……

ロスト以外覚えていないなら信憑性を出そうとしても難しい。

だがロストが嘘をつくわけが無いし、そんな嘘をつく必要も無い……
しかしどんな感覚なんだろうか？

自分だけ記憶が残つて、他は覚えていないとは……

……

今考えても仕方無いな……

風呂にでも入つてくるか……

確か大浴場があつたな。

ファ

「そろそろ風呂に行く。」

君達は？」

エミ

「あ！ 行く行く」

そう言うと、支度を始めた。

ホテル内 大浴場
男湯

服を脱ぎ、腰にタオルを巻く。
激しい戦闘が無くなった現在でも、体が鍛えられている。
身長も高いので威圧感がある。

浴場内に入り、最初に体を洗う。
そのまま髪も洗い、浴槽に向かった。
肩まで浸かる。

ファ

「……なるほど……
良い湯だ……」

ルシ

「オッサンかw」

いつの間にかルシフェルが隣にいた。

ファ

「うお!!」

「……なんだ……兄貴か……」

ルシ

「お前がビリだな。」

他はここに来てるぞ。

「……」

ファ

「お早い事で……」

そつえばリリースとはどうなった？」

ルシ

「けしかけた奴が何言ってんだ？（- -” - -）」

俺は好きって感情がわからないんだ……

……まあ、リリースの好意に気づいてわかったが……
この感情が好きって意味なんだろうな……」

ファ

「いつから？」

ルシ

「たぶん……」

ローグス内のバカを追った時……

……

そうだ！ その時カザリって奴に会ったんだが、知り合いか？」

ファ

「誰だよ？」

少なくとも俺は知らない」

ルシ

「そうか。」

実はな……

かくかくしかじか……」

ファ

「銀行強盗？」

その犯人の1人がそいつで、もう1人は原型を留めない位に死んで
いた……

コワイこった」

ルシ

「なかなか興味深い事件じゃないか？」

今ガーディアンズが探してるが……」

ファ

「考えてる事はわかる。

さっさと始末した方が大事に至らないんだろ？」

ルシ

「その通り！」

()

こっちでも探してるから、その時は頼む」

ファ

「いつから俺は兄貴の始末屋になった？

俺からは協力しない。

いくら特殊な能力を持っている奴でも、シヌみたいな事はしないだ
ろ。」

.....

もう1度言っ。

俺は兄貴の始末屋じゃない……

ましてや、殺人鬼でもない」

ファントムは風呂から上がり、浴場を出ていった。

ルシ

「そんなつもりじゃなかったんだかな？」

”(ノ<>)ノ”

言い方悪かったか？

ロスト？」

ザバア！

と、お湯の中からロストが出てきた。

ロス

「確かに悪かったが……」

あれだけの情報を言ってるのに、手伝わないのは少し冷たいな。しかも俺の話もしない」

ルシ

「お前のその話は信じる奴に限られてる。

星霊祭が無くなって違う未来が進んでいるなんて……」

まあ、ロストの事をよく知ってるなら信じられる話だな。(。
。) 「

ロス

「嬉しいね、信頼してくれる仲間が2人もいるんだから」

ルシ

「皆信じる……」

たぶんな……」

ロス

「たぶんかよ！」

2人は大きな声で笑った。

ホテル内 ロビー 休憩所

ソファーとテーブルが並んでいる休憩所に、ファントムは座っていた。

ファ

「カザリ……」

「一体誰なんだ？」

銃弾を跳ね返したって話だが……」

エミ

「どしたの？」

独り言を喋っていると、いつの間にかエミリアがいた。

ファ

「エミリアか……」

……？ 他の3人は？」

エミ

「まだお風呂」

(ファ)

抜け駆けって事か……

エミ

「今の独り言みたいだったけど……
病んでるの？」

ファ

「何でそんな答えになる？
病んでる風に見えるか？」

エミ

「見えない」

隣に座るエミリア。

ファ

「部屋に帰らないのか？」

エミ

「鍵はファントムが持ってるじゃん」

ファ

「あ………そうだったな。

ほら………」

ファントムは鍵を渡したが、エミリアが拒否する。

エミ

「まだ良いよ」

ファ

「そうか。」

「じゃあ牛乳でも買ってやる」

エミ

「バカにした？」

ファ

「まさか。

何をバカした？」

エミ

「胸」

ファ

「あ！ 自分で言った！

自分でもそうおもっ……

どわ！」

エミリアの鉄拳が頬にクリーンヒットした。

ファ

「すみません、言い過ぎました」

エミ

「わかれば良いのよ」

ファ

「……なんか夫婦漫才みたいだな……」

それを聞いて顔を赤くするエミリア。

エミ

「ア…アタシは良いのよ？
アンタと結婚……したって……」

(フア)

(ドキッ)

まただ……

この感情はマリだけだと思ったが……

……

まあマリとは、恋人というよりかは夫婦みたいなものだが……

フア

「なあ、エミリア」

エミ

「何？」

フア

「……

ある奴が悪い事を企んでいるとして、その企みが実行される前にそ

いつを倒すのは……
どう思う?」

エミ

「唐突だな」……

……答えるとするなら……

まあその悪い奴によるよね……

改心出来るなら手加減出来るけど、カムハーンみたいな奴は考える
よね……」

ファ

「……もっともらしいな。

……ありがとう、参考になったよ」

ソファアから立ち、歩き出すファントム。
エミリアもついていく。

エミ

「まさか、また危ない事を考えてないよね?
だとしても、アタシ達にも話さないよ?」

ファ

「危ない事は君達に協力を求める。
シ又を倒して帰った時、約束した」

エミ

「なら良いけど」

ファ

「心配か？」

エミ

「当たり前でしょうー！」

ファ

「悪い」

手を差し出すと、エミリアが握ってきた。

ファ

「心配させないようにしないと……」

エミ

「だから手を繋ぐの？
落ち着くけど」

エミリアが微笑むと、
ファントムも微笑んだ。

その後、大広間で夕食を食べ、全員部屋に戻った。

ファントム達はルミアがいる為か、変な事は無かった。
ルミアがいなかったら、せわしない夜だっただろう……

明朝 5時00分

まだ薄暗い時にファントムは早く起きて、近くの町を散歩していた。
リゾート地区あって、町も綺麗だ。

ファ

「良い町だ……」

？

「人間の町が好きなんですか？
昔とは大違いだ」

後ろから声が聞こえ、振り返る。

そこには、

カザリ・イリオンが立っていた。

ファ

「誰だ？」

カザ

「今の貴方とは……」

はじめましてですね。

私はカザリ・イリオン。

貴方とは腐れ縁ってやつですよ」

ファ

「兄貴に聞いた程ウザくはないな」

カザ

「貴方がいる時だけです」

ファ

「フン、だったら身なりも整えろ」

カザリの格好は、チャラい服にアクセサリ、髪型も遊んだ感じだ。

カザ

「勘弁して下さい。」

これは私のスタイルなんです」

フア

「……で？ 何の用だ？」

返答次第じゃ殺す」

カザ

「物騒ですね……」

大丈夫ですよ、危害を加えに来たわけではありません。
確認作業です」

フア

「何のだ？」

カザ

「私と会っても……」

思い出しませんか？」

フア

「会った事のない奴について何を思い出す？」

カザ

「フッ……」

そうですね。

私だけじゃ不足してますね……

……

……私達はまた出会うでしょう。

貴方も、エミリア、ナギサ、シズル……

12人はまた結束します」

そう言い残すと高く飛び、遠くへ消えていった。

ファ

「……………」

やはり、何もしていない奴に手を上げる事は出来ないな。

……何も起こらなければいいが……」

ファントムはホテルへの
帰路についた。

企画終了後……

リトルウィング事務所

事務所の一角にウルスラ、チェルシー、マリが集まっていた。

ウル

「どうだった？」

マリ

「ファントムの心を読んだら……

……3人に好意を抱いたみたい」

チェ

「作戦成功ネ！」

ウル

「そうね。

マリ、ありがとう」

マリ

「いえいえ、元からああさせるのは約束だったし。

……それじゃあ」

(マリ)

ファントムもお兄さんもロストさんも……

隠し事が下手だな……

まあ私は読心術を使えるから仕方無いけど……

除け者は許さないんだから……！

- e n d -

く好感度上昇企画 5く（後書き）

そろそろ新シリーズを開始するので、リクエストストーリーはお早
めに。

ある程度の事は書けます。

しっかし……

書きたい事だけ書いたな……日常編……

く神の計画く（前書き）

もしかしたら、

12人の秘密がわかるかも？

ちょっとヒントを出しすぎたかも……

く神の計画く

天界

シヌは気がつくど、真っ白な平原に立っていた。

シヌ

「！！」

どこだ！？

さっきまで地獄とやらに……

……

……あれは……」

少し向こうの方に

マリオネット（神）と人型のヤオロズ、ミレイ・ミクナがいた。
何やら言い争っている。

近づいていくと話の内容が聞こえてきた。

神

「ホントしつかり」

ロストだけ若干記憶が残ってるって……
いやホントしつかり」

ヤオ

「しつかりしつかり、うるさい神じゃの！
だったら神が干渉しろ！」

神

「出来ないのわかってるだろ！」

ヤオ

「なら文句を言っな！」

ミク

「まあまあ、2人とも落ち着いて」

(シヌ)

ロスト……？

アイツら知り合いなのか？

最低でも、ロストとミレイ・ミクナは知り合っていないはずだが……
……それよりなんで人形が喋ってるんだ？

神

「ん？」

……おお！ シ又だ！

人形に名を呼ばれ、身構える。

神

「そう驚かないで座るんだ」

目の前のイスを指す。

シ又

「どこだどこ？」

神

「いわゆる天国だな。早く座りなよ」

若干警戒心が解けないものの、イスに座る。

神

「さあ何から話せばいいか……」

ヤオ

「神病の話はどうじゃ？」

神

「長いな……」

「一気に教えた方が良く」

シヌ

「その前に君達は……」

「……！？……」

シヌの頭の中に、何か流れ込んできた。

同時に、途方も無い怒りと殺意が込み上げてくる。

神

「それが神病の真実。

作ったのは墮天使、

理由は神である私を殺す為」

シヌの拳が怒りで震える。

歯ぎしりも激しくなる。

神

「あの時は止められなくてすまない。
どうにかしようとしたが、私は直接干渉できなくて……」

シヌ

「弁解はいい……」

あの堕メ野郎を殺す方法は？」

ヤオ

「ほづ……」

良い心意気じゃが、無理な話じゃ」

シヌ

「何だと？」

神

「ヤオロズ、黙ってて。」

つまり位の高い霊体は、Aフォトンを用いても殺すのは難しいんだ。
単に戦闘能力の差もあるが……」

腕を斬られてわかったんじゃないかな？」

シヌ

「！？ 何故？」

神

「全知全能だからね。」

……
話は変わるけど……

私は神として、シヌ君に罰を与えなければならぬ。
30種類以上の人類滅亡の罪……」

シヌは明らかに不機嫌な顔をした。

神

「自分が悪いのにそんな顔はないんじゃないか？」

……償えたら

如月・カゲツとシエラに会わせられるぞ」

シヌ

「……！ 彼女達はここに！？」

神

「罪という罪が無いからね。」

……それと会わせるだけじゃない……

天界に仲良く住めるし、私自ら墮天使君を消滅させよう」

シヌ

「それは良い特典だな……」

だが俺の罪は重いはずだ」

神

「大丈夫さ。」

罪を帳消しにする内容は……

……

“ 12人の制裁者”

(twelve punisher)

トウウェルブ・パニッシャーの抹殺

(シヌ)

うわぁ……中二臭い……

神

「墮天使が付けた名前だ。
勘違いしないでくれ」

シヌ

「心を読んだ!？」

神

「全知全能だからね。
ミレイ君と協力するんだ。」

……トウウェルブ・パニッシャーなんだが、誰かはわかるだろ?」

シヌ

「無理言つな……」

……

12人……

制裁者……

堕天使……

神病……

……まさか……」

シヌ

「気づいたかな？」

ファントム、エミリア、ナギサ、シズル……

旧文明の時はファントムだけで気づかなかったただろうけど、今は知
っている名前が4人になった。

その時も偶然だと思っていたんだろうけど」

シヌ

「だが、ファントム以外瓜二つだ。

名前、性別、体格、性格、髪型、声……

全てアイツらと同じだった」

神

「君、数十兆年生きてんだよね？」

それだけ生きていれば、似てる奴くらいいるものな。

……彼らが……

……

これ以上話したら作者に怒られそうだ……」

シヌ

「作者？」

神

「こつちの話。

あとは現星霊、ミレイに聞いてくれ。

私はちよっと用が出来た」

シヌ

「用って何だ？」

神

「いや」

ある神話の女神がさ……

少し短気で……怒って洞窟から出てこないんだ。

昔はあつちで解決出来ただけど、今回はホントに怒っちゃって……
可愛い顔してんだよ？」

シヌ

「名前は？」

神

「天照。」

地球の日本て言う国の神さ」

そう言い残すと、目の前から消えていた。

(シヌ)

ファントム君の言っていた神って……

今の奴なのか？

ミレ
「シヌさん」

ミレイに話しかけられるシヌ。

シヌ

「ん？ なんだい？」

ミレ

「正直に申し上げますと……」

私は貴方に対して良い印象がありません」

シヌ

「グラールの人間を殺そうとしたから？
いや、殺したから？」

ミレ

「はい。」

しかし神が協力してほしいと言っていますので、無理にでも協力します。

それに神の監視下であれば安全ですので」

シヌ

「俺は猛獣か？」

まあ良い。

具体的にミレイちゃんとはどんな事をするんだ？」

ミレ

「償い始める日まで数ヶ月残っています。焦らないで下さい。」

質問に答えていきましょう」

シヌ

「トウウェルブ・パニツシャーの目的は？」

ミレ

「ご存知の通り12人は、墮天使が神を倒す為の集まりですが……神を倒す条件があるそうです」

シヌ

「条件？」

ミレ

「ヒトを制裁させる事。」

それが神との戦争参加の条件です」

シヌ

「人類の制裁か……」

あのゴミ共が考えそうな事だな。

………

………ん？

何故俺は12人の1人じゃないんだ？」

ミレ

「貴方は偶然なんです。」

そうとしか言い様がありません」

シヌ

「……そうか……」

なら、こうはなりたくなかった……」

……

そうしたらカゲツと一緒に……」

でもそれでは、太陽王の時にシエラとは会えなかったよな……」

項垂れる様にテーブルに突っ伏した。

ヤオ

「変わった奴じゃの」

ミレ

「今日だけでかなりの情報を頭に入れたんです。
混乱気味なんでしょう」

シヌは寝てしまっていた。

く神の計画く（後書き）

セリフ多かつたな……

これで繋ぎの話は終了です。

リクエストストーリーは

2011年 11月20日まで募集します。

リクエストストーリーの在庫が無くなったら、完結済みにします。
同時に新シリーズも投稿します。

タイトルは

ファンタシースターポータブル2

偽神達の転生

（日常編続き）

少し名前がマシになったかな？

新シリーズ確認してネ！

くお知らせ

お知らせ

うお！

誰もリクエスト無しwww

まあ過ぎたもんはしょうがない。

新シリーズの話をしましょう。

鼻、塩、塩

(話をしよう)

あれは……

って……

エ シャダイのネタ多いな……

カザリの話しますか。

ガーディアンズ

パルム支部
留置場

殺風景な留置場……

靴の音が響く……

靴の持ち主はある1つの檻の前で止まった。
檻の中には、数日前に銀行強盗を起こした、元ローグスのビーストが入っていた。

強盗犯

「……お前!!」

何でここに!?!」

カザ

「決まってるじゃないっすか」

“用済み”

アンタは僕ちゃんを少ししか知らないけど、色々支障があるんすよ」

強盗犯

「な……ふ、ふざけるな!

使っただけ使っってこの有り様なん……

ガッ!」

カザリが手をかざすと、強盗犯は壁に押し当てられた。

カザ

「うるさい“ゴミ”だな……

黙って死になよ」

メキメキ、ボキ！

骨が軋む音から、折れる音に変わる。

痛みで叫ぶ怪我だが、

強盗犯は喉も肺も圧迫されているので、叫び声が全く聞こえない。

強盗犯

「（んー！んうー！！

……………）

……………」

白目を剥き、気絶したようだ。

カザ

「脆いな……
押し潰される」

手を引き、押し出す。

ブシャー!!

呆気なく体が潰れ、檻の中は血塗れになってしまった。

カザ

「綺麗じゃないですか。

“拒絶”の力はこういう使い方が良い」

また靴の音が響く……

カザリは留置場をあとにした。

新シリーズの

ファンタシースターポータブル2
偽神達の転生

(日常編続き)

は、今の話の半年後です。

フロントム達がグラールに来て6年。

SEED事件から5年。

亜空間事件から2年。

欠片事件から1年半。

狂神の信念から1年。

結構壮大だな……

マリなんて20歳ですよ。

新シリーズは投稿済みなんで、是非読んで下さいネ。

これまでよりも

ブラックで狂って、シリアスな出来にします。

くお知らせ（後書き）

カザリ “拒絶”

断る事を意味するが……

他人を避ける意味や、はね除ける意味がある。

他人を拒絶する理由は様々で、

嫌悪、差別、軽蔑、

蔑み、嘘、鬱陶しさ……

拒絶のほとんどは、相手に対して良い印象を持っていない場合が多い。

しかしファントムの様に、仲間思いな人が誰かを守る為に拒絶する
場合がある。

カザリの場合は

学生時代の影響があるようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3141x/>

ファンタシースターポータル2 日常編（永遠なる信念続き）

2011年11月20日19時00分発行